

---

## Ⅱ 第一群調査（一般意識調査）

---

## Ⅱ-1 最終アウトカム関連の集計・分析

## 1. 結婚意欲

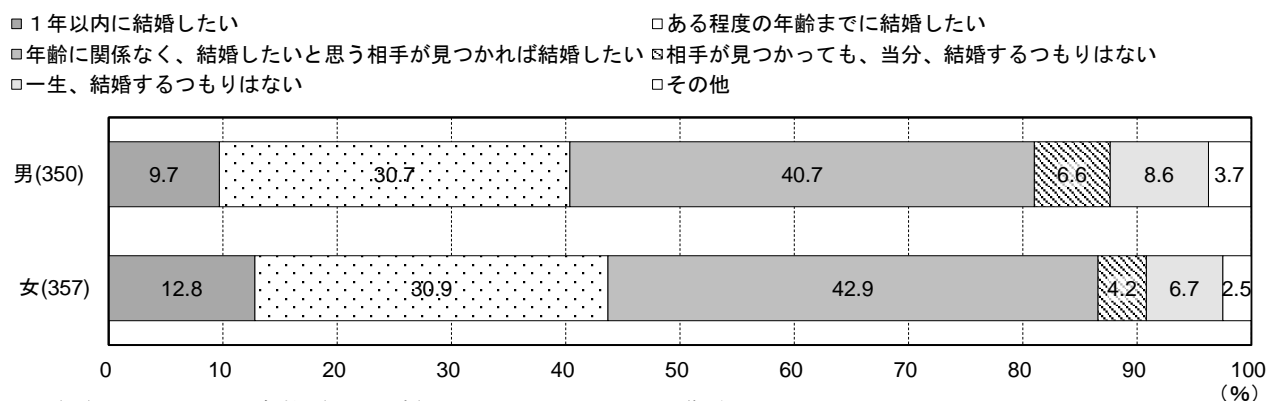
### (1) 未婚者の結婚意欲の強さ

#### (結婚希望を持つ者は男女とも 80%を超える)

未婚者に対して、結婚意思の有無と、結婚に対する年齢志向（希望する結婚年齢がある）や相手志向（結婚したい相手が見つかることが結婚条件になる）を尋ねることにより、結婚意欲の強さを把握した(図Ⅱ-1)。結婚意思のある者の中では、年齢志向は相手志向より結婚意欲が強く、結婚意思のない者では「一生、結婚するつもりはない(生涯非婚)」の方が「当分、結婚するつもりはない」より結婚意欲は弱いと考えられる。

現在「結婚したい」という結婚意思を持つ者をみると、男性 81%、女性 87%であり、男女とも 80%を超える。

図Ⅱ-1 結婚についての考え(未婚者、単数)



#### (未婚者の希望出生率は2を下回る)

上記の結婚意欲別に理想の子ども数を集計して「未婚者希望出生率」を算出すると、男性は 1.91、女性 1.93 となる(表Ⅱ-1)。このため、未婚者の結婚意欲は、理想の子ども数を実現されても人口置換(2.07)を下回る水準にあると捉えることができる。

さらに、未婚者の結婚希望や理想の子ども数を実現されないことにより、現実の出生率は上記の希望出生率から低下するため、人口水準を維持するためには元々の結婚意欲がもっと高い水準でなければならないという見方もできる。

表Ⅱ－１ 未婚者の結婚意欲と理想の子ども数を元に算出した希望出生率

(男性) N=349

理想の子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想の子ども数の回答割合	1年以内に結婚したい	0.06	0.76	0.18	0.00	0.00	0.00	1.00
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.06	0.66	0.25	0.01	0.02	0.01	1.00
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.05	0.68	0.22	0.02	0.00	0.03	1.00
	当分、結婚するつもりはない	0.00	0.50	0.11	0.00	0.00	0.39	1.00
	一生、結婚するつもりはない	0.00	0.32	0.06	0.03	0.00	0.59	1.00
	その他	0.20	0.70	0.00	0.10	0.00	0.00	1.00
② 理想の子ども数×①	1年以内に結婚したい	0.06	1.52	0.55	0.00	0.00	0	2.12
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.06	1.32	0.74	0.04	0.10	0	2.24
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.05	1.35	0.65	0.08	0.00	0	2.13
	当分、結婚するつもりはない	0.00	1.00	0.33	0.00	0.00	0	1.33
	一生、結婚するつもりはない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0	0.00
	その他	0.20	1.40	0.00	0.40	0.00	0	2.00
③ 構成比	1年以内に結婚したい	0.09	④=②×③					0.20
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.30						0.68
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.42						0.90
	当分、結婚するつもりはない	0.05						0.07
	一生、結婚するつもりはない	0.10						0.00
	その他	0.03						0.06
未婚者希望出生率 (④の合計)								1.91

(女性) N=358

理想の子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想の子ども数の回答割合	1年以内に結婚したい	0.02	0.57	0.34	0.02	0.00	0.04	1.00
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.06	0.54	0.37	0.00	0.00	0.04	1.00
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.08	0.56	0.23	0.02	0.00	0.11	1.00
	当分、結婚するつもりはない	0.19	0.13	0.31	0.00	0.00	0.38	1.00
	一生、結婚するつもりはない	0.12	0.28	0.16	0.00	0.04	0.40	1.00
	その他	0.13	0.63	0.25	0.00	0.00	0.00	1.00
② 理想の子ども数×①	1年以内に結婚したい	0.02	1.15	1.02	0.08	0.00	0	2.27
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.06	1.07	1.11	0.00	0.00	0	2.24
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.08	1.12	0.68	0.08	0.00	0	1.96
	当分、結婚するつもりはない	0.19	0.25	0.94	0.00	0.00	0	1.38
	一生、結婚するつもりはない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0	0.00
	その他	0.13	1.25	0.75	0.00	0.00	0	2.13
③ 構成比	1年以内に結婚したい	0.13	④=②×③					0.30
	ある程度の年齢までに結婚したい	0.30						0.68
	結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい	0.43						0.84
	当分、結婚するつもりはない	0.04						0.06
	一生、結婚するつもりはない	0.07						0.00
	その他	0.02						0.05
未婚者希望出生率 (④の合計)								1.93

(注) 「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」は、理想の子ども数の回答があっても予想出生率への寄与はゼロとした

(2) 結婚意欲に影響を及ぼす要因

①年齢

(年齢志向の者が結婚することなどにより結婚意欲の構成比が変化)

年齢によって、結婚意欲の構成比は大きく異なる。未婚者の20歳代では、年齢志向は男性で58%であるが30歳代では30%となる(図Ⅱ-2)。40歳代では13%であり、20歳代、30歳代、40歳代と年齢を経るごとに年齢志向が半減している。

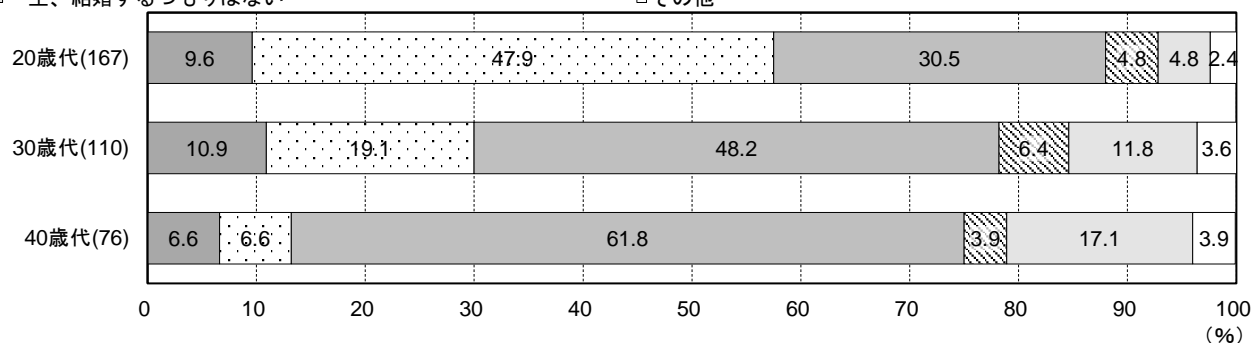
女性は、20歳代の年齢志向は63%、30歳代は31%、40歳代は6%である。30歳代から40歳代にかけての年齢志向の減少は男性より大きい。

これらの結果は、年齢の上昇が結婚意欲を変化させていることも考えられるが、主に年齢志向の者が結婚していくことにより、年齢志向の全体に占める構成比が小さくなったとみられる。

図Ⅱ-2 年齢階層別にみた結婚意欲(未婚者、単数)

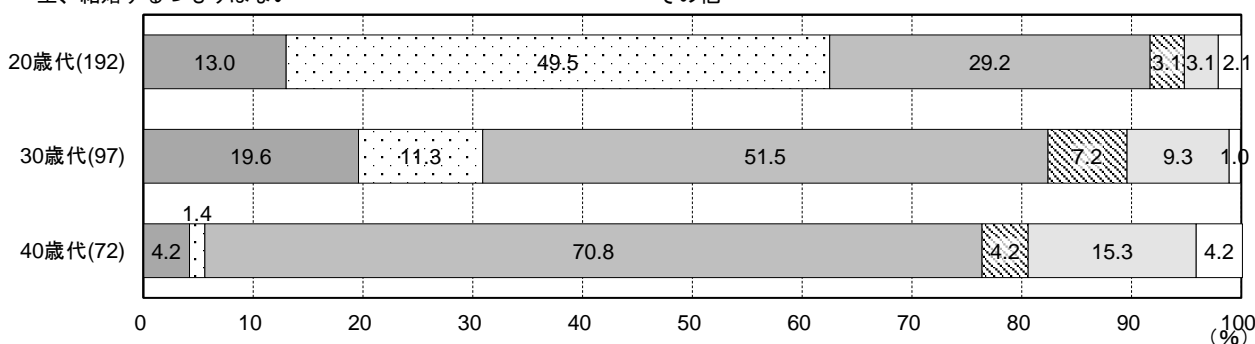
(男性)

- 1年以内に結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



(女性)

- 1年以内に結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2920	0.3761
P値	0.0000	0.0000

## ②結婚希望の実現見通し

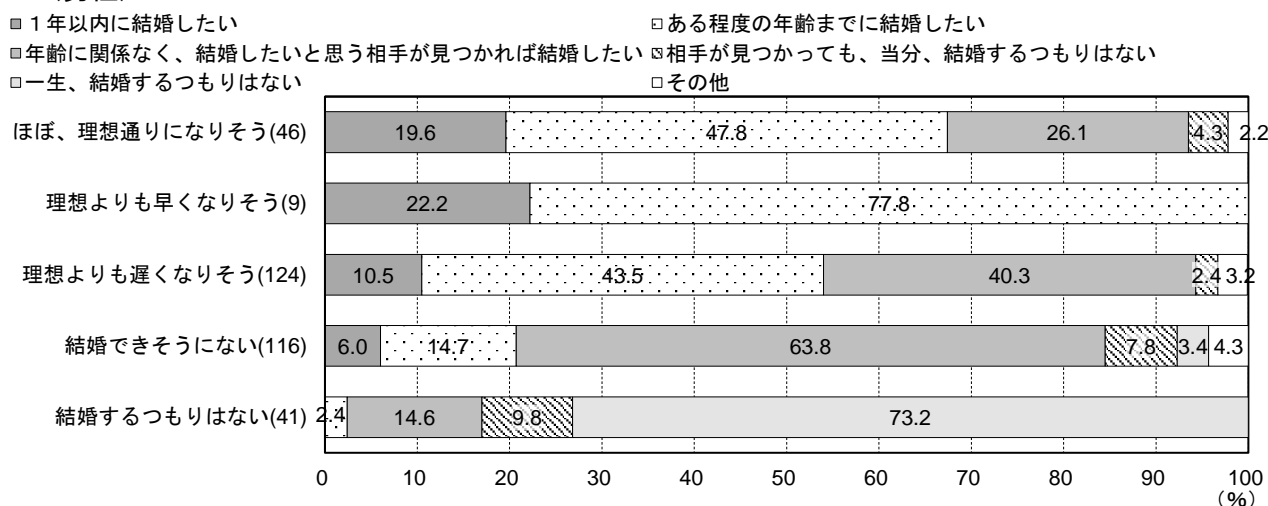
(将来の見通しは現在の結婚意欲を変化させる)

図Ⅱ-3は、これから先の結婚見通しが現在の結婚意欲に対して与える影響を把握するため集計を行った。

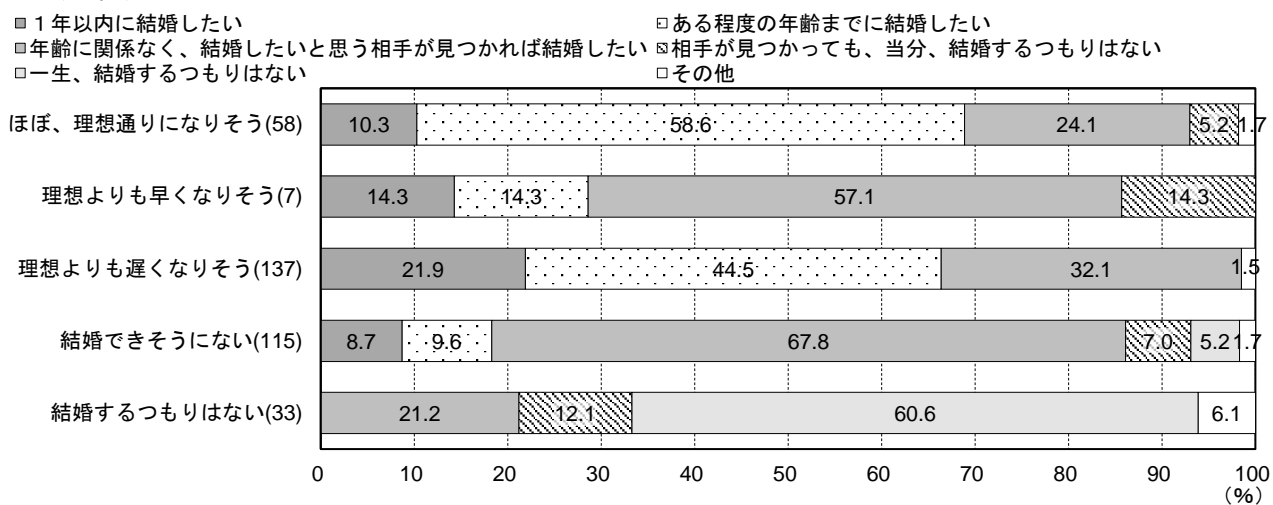
将来の結婚見通しが「結婚できそうにない」では男性の相手志向は64%、女性では68%を占める。「理想よりも遅くなりそう」でも相手志向は男性で40%、女性で32%に上っている。この結果は、現在の相手志向が「結婚できそうにない」や「理想よりも遅くなりそう」を増やしていることも考えられるが、将来の結婚見通しが希望通りになりそうにないから現在の結婚意欲が弱まると考えることもできる。

図Ⅱ-3 結婚見通し別にみた結婚意欲 (未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.4480	0.4247
P値	0.0000	0.0000

③交際状況

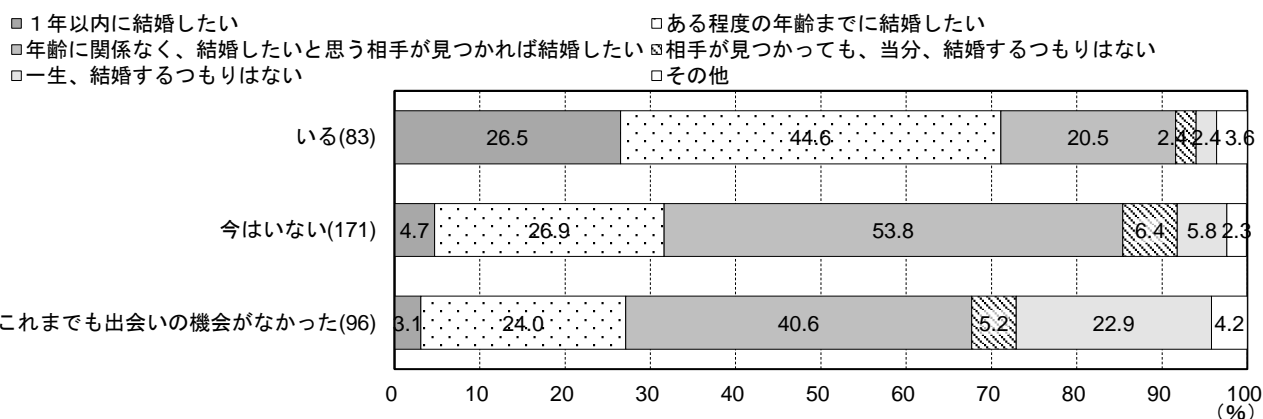
(現在・過去の交際状況は結婚意欲を大きく変化させる)

男女とも、現在、交際相手がいる者は、交際相手がいない者に比べて結婚の相手志向が小さくなっている(図Ⅱ-4)。これは、交際相手が結婚対象になり得ることが理由と考えられる。ただし、現在交際相手がいる者でも相手志向が男性で21%、女性で31%存在する。

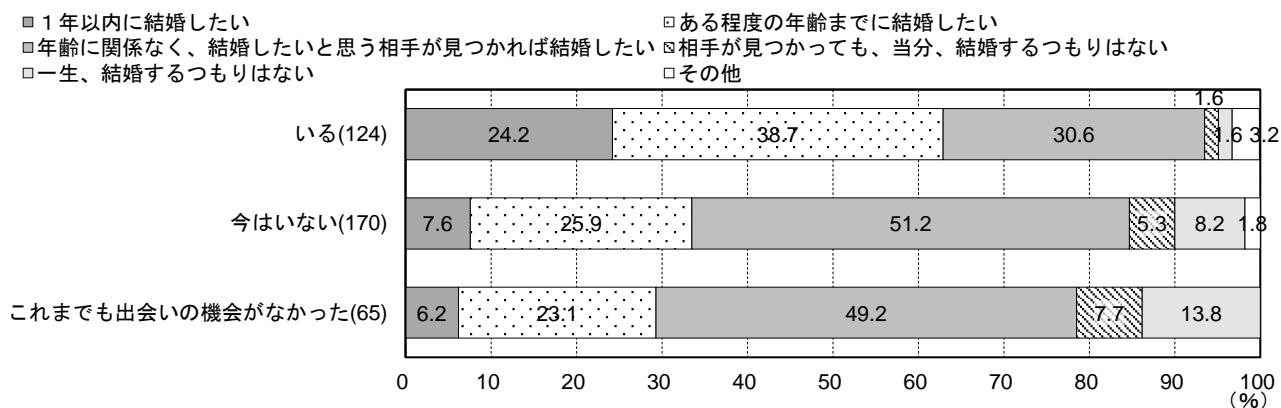
交際経験がない者は、「今はいない」者に比較して生涯非婚の割合が大きく、交際経験のない者の生涯非婚は、男性23%、女性14%に達する。

図Ⅱ-4 交際状況別にみた結婚意欲(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3443	0.2554
P値	0.0000	0.0000

(交際経験は「年齢志向」の出現率を2倍に高める)

交際状況の結婚意欲に対する影響の強さを測るため、まず、未婚者の結婚意欲の回答のうち、年齢志向を「意欲強」とし、相手志向を含むその他の回答はすべて「意欲弱」に区分した(表Ⅱ-2)。次に、交際相手が「いる」「今はいない」を「出会いあり」、「これまでも出会いの機会がなかった」を「出会いなし」として、それぞれの「意欲強」の出現率(オッズ)を把握した。

オッズ比は、「出会いあり」であると、「出会いなし」に比べ「意欲強」が何倍現れやすくなるかを示し、出会いのあり・なしでみた交際状況の結婚意欲に対する影響の強さを示す。影響がないときのオッズ比は1であり、表Ⅱ-2の男性2.2倍、女性2.1倍という数値は、交際状況は結婚意欲にかなり強い影響力を持つことを示している。

表Ⅱ-2 交際状況の結婚意欲に対する影響の強さ(未婚者)

(意欲強・意欲弱)

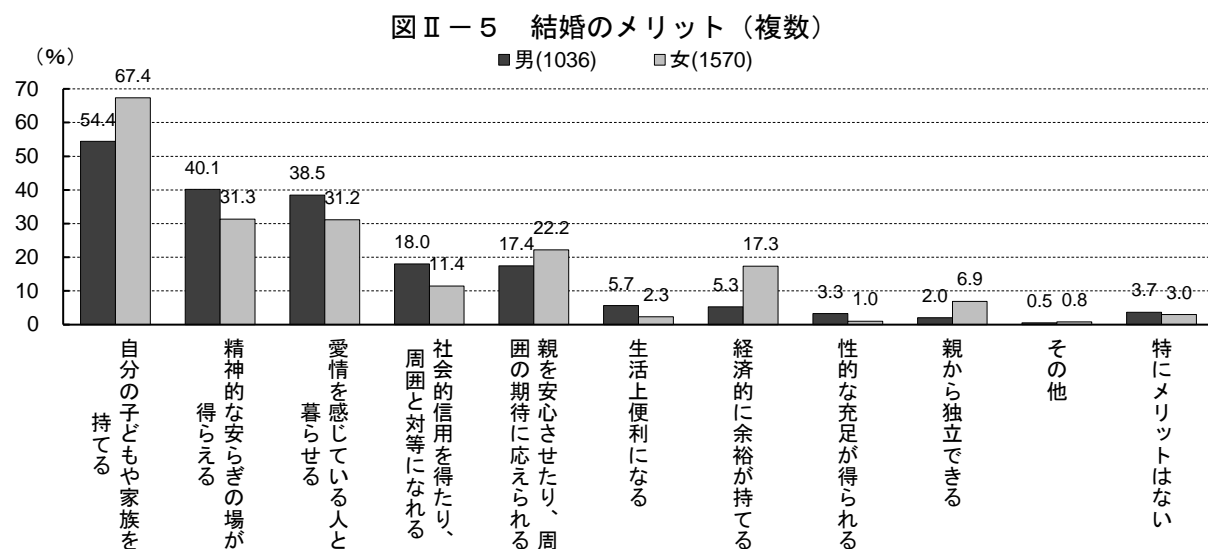
性別	交際状況：出会いあり				交際状況：出会いなし				オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
男	254	44.5	55.5	0.80	96	27.1	72.9	0.37	2.16
女	294	45.9	54.1	0.85	65	29.2	70.8	0.41	2.06

④結婚観(結婚のメリット・デメリット)

i) 結婚のメリット

(男女とも「子どもや家族を持てること」が最も多い)

結婚のメリットをどのように捉えているかにより結婚観を把握すると、男女とも「自分の子どもや家族を持てる」が最も多く、男性では54%、女性では67%であった(図Ⅱ-5)。この他、「精神的な安らぎの場が得られる」「愛情を感じている人と暮らせる」といったメリットを挙げる者が30%から40%に達し、これらは男性が女性をやや上回っている。



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

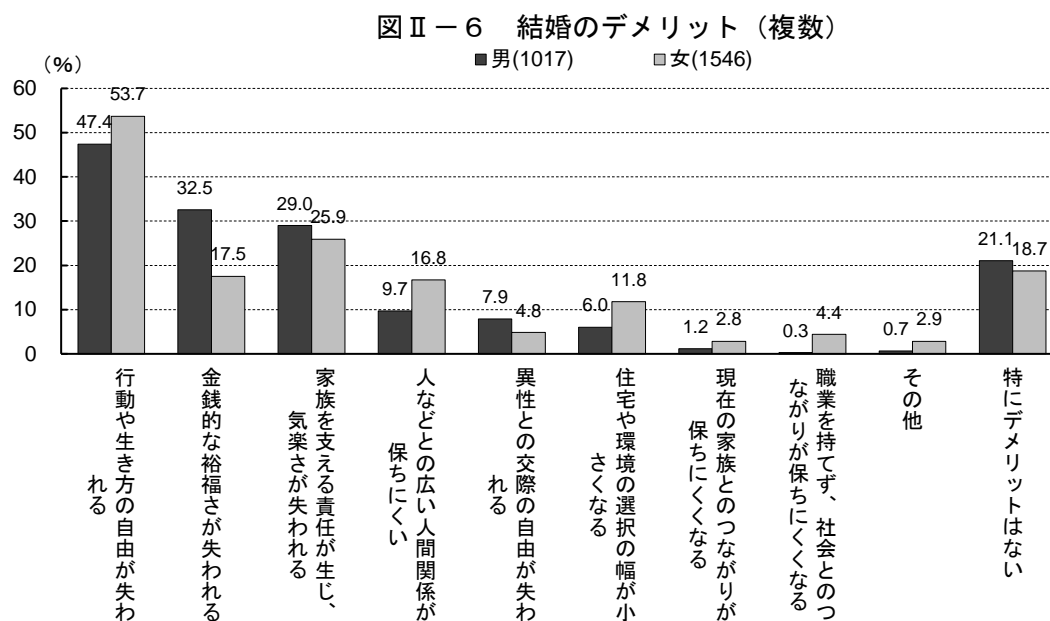


ii) 結婚のデメリット

(ライフコースの選択が結婚意欲に影響)

結婚のデメリットにより結婚観を把握すると、男女とも「行動や生き方の自由が失われる」が約半数に達し、どちらかと言えば女性に回答が多い(図Ⅱ-6)。ライフコースの選択が結婚意欲に影響することを示唆している。

この他、「金銭的な裕福さが失われる」「家族を支える責任が生じ、気楽さが失われる」をデメリットとして挙げる者が多く、おおよそ20%~30%に上る。



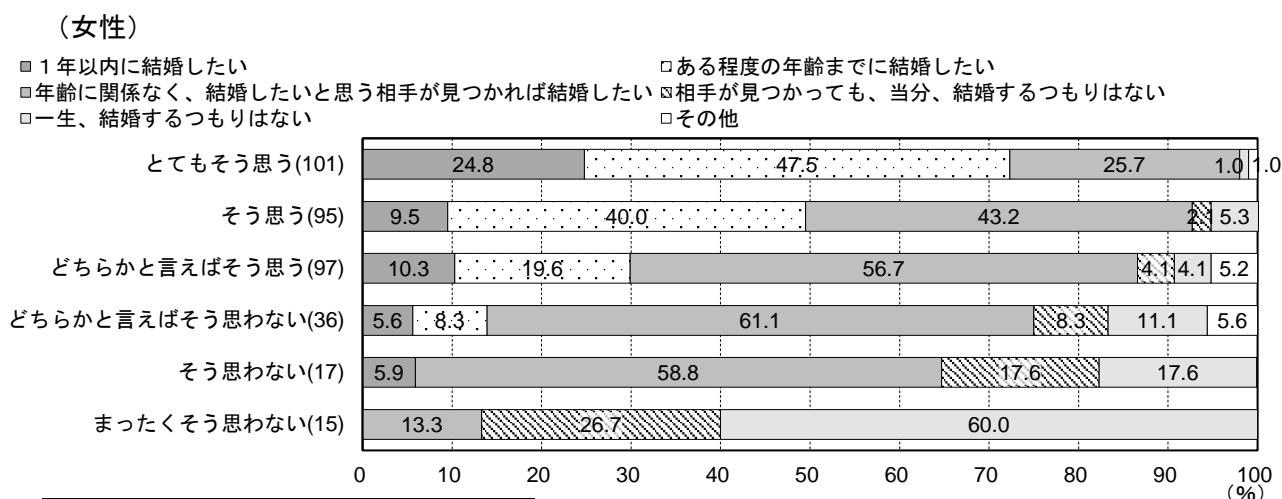
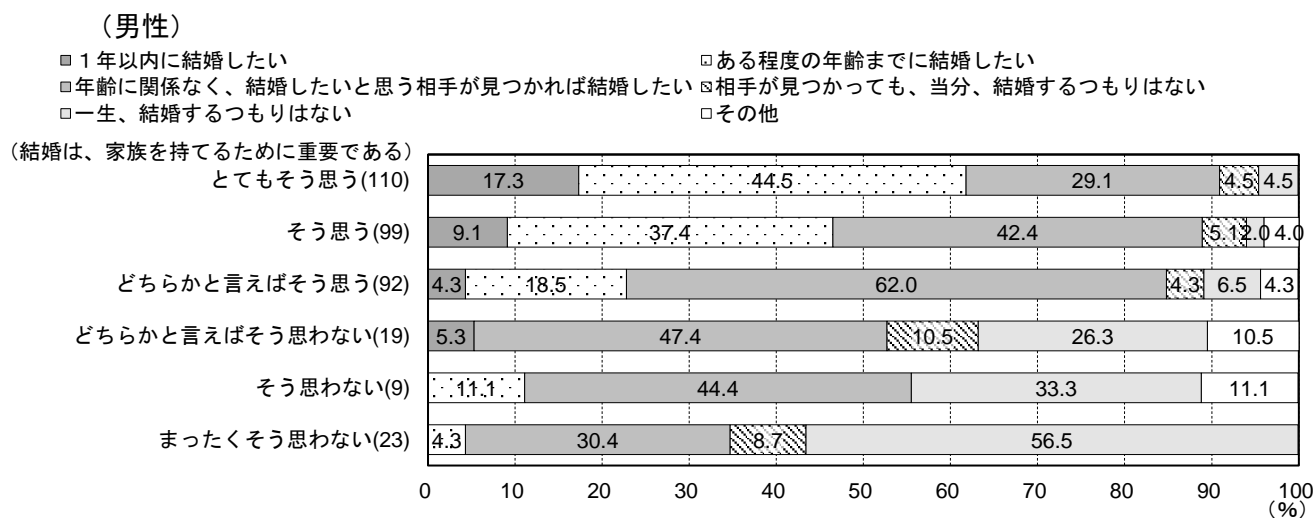
(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウエイトバック集計である

⑤ 家族観

(家族観は結婚意欲に極めて強い影響を及ぼしている)

調査では、結婚に関連した家族観を代表して「結婚は、家族を持てるため重要である」という意見に賛同するかどうか6段階のリッカード形式で尋ねた。男女とも、上記の家族観への賛同度が高いほど年齢志向の割合が高くなり、結婚意欲が強くなることが明らかである(図Ⅱ-7)。

図Ⅱ－７ 家族観別にみた結婚意欲（未婚者、単数）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2796	0.3110
P値	0.0000	0.0000

家族観が結婚意欲に与える影響の強さをみるため、家族観の「とてもそう思う」と「そう思う」を「積極的肯定」、「どちらかと言えばそう思う」から「まったくそう思わない」までを「消極的肯定・否定」としてオッズ比を算出した（表Ⅱ－3）。

家族観が「積極的肯定」であると、「消極的肯定・否定」に対して結婚意欲の「意欲強（年齢志向）」の出現率が男性6.0倍、女性5.9倍に変化し、家族観は結婚意欲に対して極めて強い影響を及ぼしていることがわかる。

表Ⅱ－3 家族観の結婚意欲への影響の強さ（未婚者）

(件、%、倍)

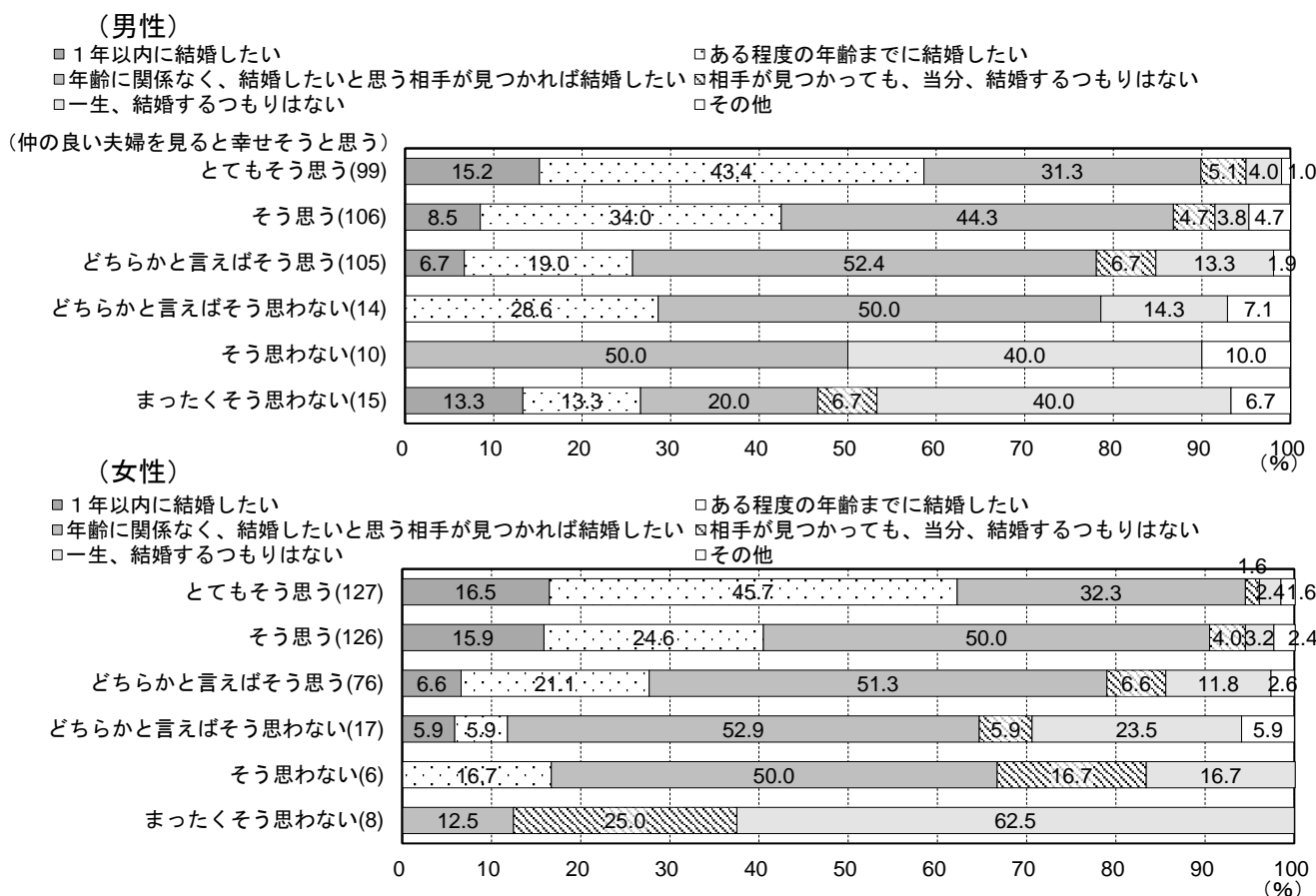
性別	家族観：積極的肯定				家族観：消極的肯定・否定				オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
男	209	54.5	45.4	1.20	143	16.8	83.2	0.20	5.95
女	196	61.2	38.8	1.58	165	21.2	78.7	0.27	5.86

⑥家族に対する感受性

(家族に対する感受性も結婚意欲に極めて強い影響を与える)

調査では、「仲の良い夫婦を見ると幸せそうと思う」という家族に対する感受性をどの程度持っているかを尋ねた。図Ⅱ-8の通り、男女とも、家族に対する感受性が強いほど結婚意欲も強くなることが明らかである。

図Ⅱ-8 家族に対する感受性別にみた結婚意欲(未婚者、単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1992	0.2352
P値	0.0000	0.0000

家族に対する感受性が結婚意欲に与える影響の強さを測るため、家族に対する感受性は「積極的肯定」と「消極的肯定・否定」、結婚意欲は「意欲強」と「意欲弱」に二分してオッズ比を算出した(表Ⅱ-4)。

家族に対する感受性が「積極的肯定」であると、「消極的肯定・否定」に対して、結婚の「意欲強(年齢志向)」の出現率が男性3.1倍、女性3.7倍になる。

表Ⅱ-4 家族に対する感受性の結婚意欲への影響の強さ(未婚者)

性別	家族に対する感受性：積極的肯定				家族に対する感受性：消極的肯定・否定				オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
男	205	50.2	49.8	1.01	144	24.3	75.7	0.32	3.14
女	253	51.4	48.6	1.06	107	22.4	77.6	0.29	3.66

⑦所得及び労働状態

i) 結婚生活を送るための自分の所得に対する捉え方

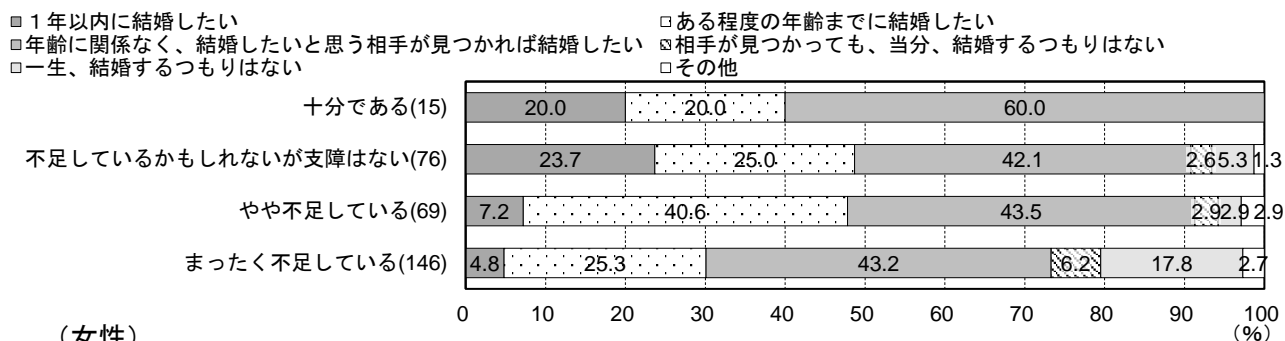
(所得は男性の結婚意欲に対して強い影響を及ぼす)

調査では、未婚者に対して「結婚生活を送るためとしたら、現在のあなたの所得についてどのように考えるか」尋ねた。男性では、現在の所得について「やや不足している」「まったく不足している」とする者は、「十分である」「不足しているかもしれないが支障はない」に比べて、結婚意欲について「1年以内に結婚したい」とする者が少ない(図Ⅱ-9)。

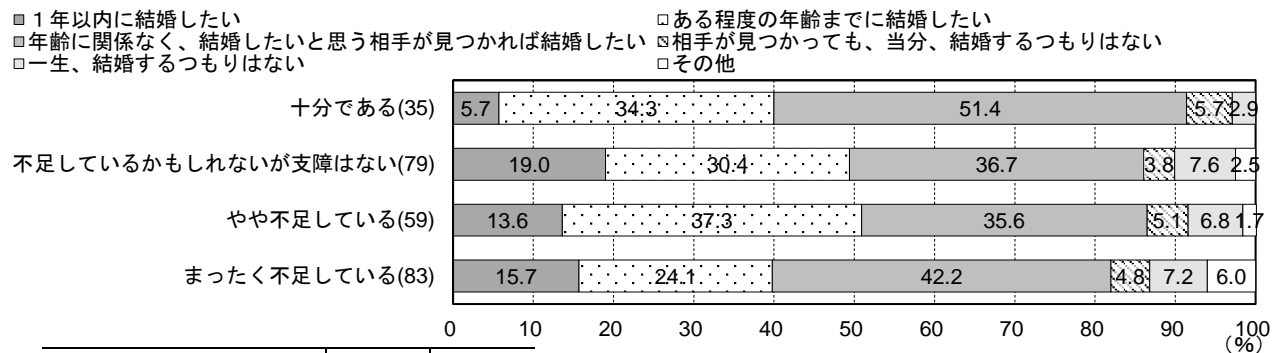
また、「まったく不足している」では、その他の回答に比較して「一生、結婚するつもりはない」という回答が18%と格段に多い。なお、女性では同様の傾向はみられない。

図Ⅱ-9 結婚生活を送るための自分の所得の捉え方別にみた結婚意欲(未婚の就業者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1918	0.1192
P値	0.0000	0.4393

所得の判断を「十分からやや不足」と「まったく不足」の二区分にすると、男性では「まったく不足」に対して「十分からやや不足」では結婚の「意欲強(年齢志向)」の出現率が2.1倍になる(表Ⅱ-5)。

表Ⅱ-5 結婚生活を送るための自分の所得と結婚意欲との関係(未婚の就業者)

(件、%、倍)

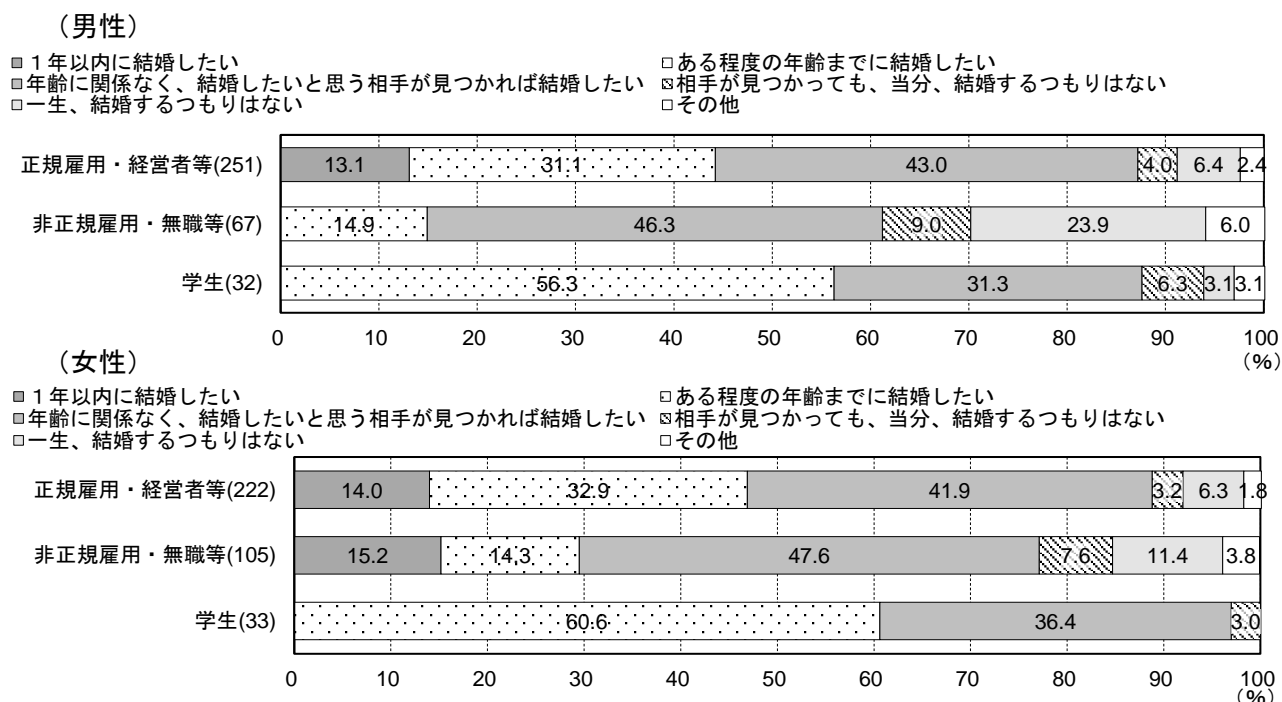
性別	自分の所得の捉え方：十分からやや不足				自分の所得の捉え方：まったく不足				オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
男	160	47.5	52.5	0.90	146	30.1	69.9	0.43	2.10
女	173	48.0	52.0	0.92	83	39.8	60.2	0.66	1.40

ii) 労働状態

(労働状態は男性の結婚意欲に対して極めて強い影響を及ぼす)

本人の労働状態を図Ⅱ－10の注釈の通り3区分にまとめ、結婚意欲との関係を見ると、男性では、「非正規雇用・無職等」は、「正規雇用・経営者等」に対して結婚の「年齢志向」が3分の1になっている。反対に、「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない」「一生、結婚するつもりはない」といった非婚志向が33%に達し、これは「正規雇用・経営者等」の約3倍である。男性ほどではないものの、女性でも同様の傾向がみられる。

図Ⅱ－10 労働状態別にみた結婚意欲(未婚者、単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2674	0.2236
P値	0.0000	0.0001

(注) 調査票の選択肢と図Ⅱ－10の区分の対応は以下の通りである(以下、同様)

正規雇用・経営者等：正規の職員・従業員、会社などの役員、自営業主・家族従業者

非正規雇用・無職等：パート・アルバイト、派遣・嘱託・契約職員、家庭での内職、失業中、家事・無職

学生：学生

「正規雇用・経営者等」と「非正規雇用・無職等」の二区分にすると、結婚の「意欲強(年齢志向)」の出現率は、男性で4.5倍、女性でも2.1倍と算出される(表Ⅱ－6)。

表Ⅱ－6 労働状態と結婚意欲との関係(未婚者)

(件、%、倍)

性別	労働状態：正規雇用・経営者等				労働状態：非正規雇用・無職等				オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
男	251	44.2	55.8	0.79	67	14.9	85.1	0.18	4.52
女	222	46.8	53.2	0.88	105	29.5	70.5	0.42	2.10

## ⑧ライフコース

### (ライフコースの志向性を表す指標の作成)

調査では、自分が希望するライフコースを実現する上で、以下の10項目について優先度が高いかどうかを尋ねた。回答は6段階のリッカード形式である。

- (1) 大学や大学院に進学し、高度な教育を受けること
- (2) 専門的知識や高度な技能を生かせる仕事
- (3) 経営者・起業家あるいは組織の中核での成功
- (4) 仕事での新しい挑戦、先端分野での活躍
- (5) 長く続けられる仕事を持つこと
- (6) 経済的なゆとり
- (7) 親や知人のいる生まれ育った地域で過ごすこと
- (8) 暮らしの穏やかさ、生活の落ち着き
- (9) 暮らしの面白さ、まちなぎやかさ
- (10) 他者に左右されない自由な生き方

上記の10項目を対象に因子分析を行ったところ、四つの因子が抽出され、このうち第一因子と第二因子は以下の項目により構成される。寄与度の順で記した。

#### ■第一因子

- ・仕事での新しい挑戦、先端分野での活躍
- ・経営者・起業家あるいは組織の中核での成功
- ・専門的知識や高度な技能を生かせる仕事
- ・大学や大学院に進学し、高度な教育を受けること

#### ■第二因子

- ・経済的なゆとり
- ・長く続けられる仕事を持つこと
- ・暮らしの穏やかさ、生活の落ち着き

第一因子と第二因子の内容から、第一因子はライフコースにおける「チャレンジ志向」、第二因子は「安定志向」というように解釈される。

次に、これら七つの項目を対象に主成分分析を行うと、第二主成分では、上記の第一因子の項目がプラスに寄与し、第二因子の項目がマイナスに寄与することがわかった。そこで、第二主成分をチャレンジ志向と安定志向の対立を表す成分と解釈して、その主成分得点を4段階（強い安定志向、弱い安定志向、弱いチャレンジ志向、強いチャレンジ志向）に区分した。

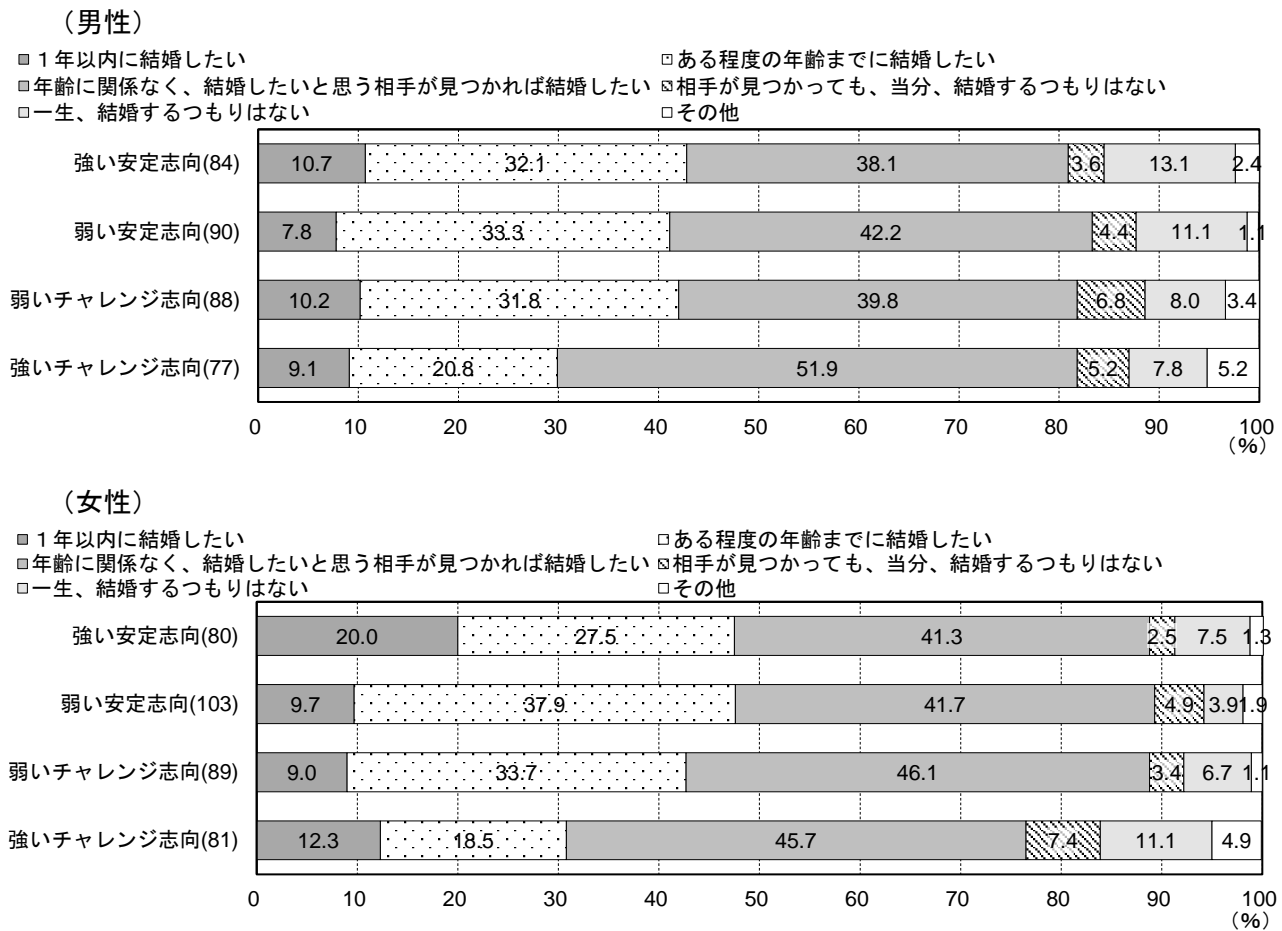
### (ライフコースの志向性と結婚意欲との関係)

ライフコースの志向性と結婚意欲とのクロス集計を行ったところ、男性では、ライフコースと結婚意欲の間に明確な関係を見出すことはできなかった（図Ⅱ-11）。

一方、女性では、「強い安定志向」に比べ「弱い安定志向」では「1年以内に結婚したい」が半減する。さらに、「弱い安定志向」に比べて「弱いチャレンジ志向」では結婚の相手志向が多くなっている。また、「弱いチャレンジ志向」に比べて「強いチャレンジ志向」では、非婚志向が19%

になるなど、チャレンジ志向が強くなるほど徐々に結婚意欲が弱くなっている。

図Ⅱ－１１ ライフコースの志向性別にみた結婚意欲（未婚者、単数）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1016	0.1412
P値	0.7867	0.1329

ライフコースの志向性を「安定志向」と「チャレンジ志向」の二区分にして結婚意欲に及ぼす影響の強さをみると、女性では、「安定志向」であると、「チャレンジ志向」に対して結婚の「意欲強（年齢志向）」の出現率が1.5倍になり、ライフコースは結婚意欲に強く影響している（表Ⅱ－7）。

表Ⅱ－7 ライフコースの志向性と結婚意欲との関係（未婚者）

(件、%、倍)

性別	ライフコースの志向性：安定志向			ライフコースの志向性：チャレンジ志向			オッズ比
	N	意欲強	意欲弱	N	意欲強	意欲弱	
男	174	42.0	58.0	165	36.4	63.6	0.57
女	183	47.5	52.5	170	37.1	62.9	0.59

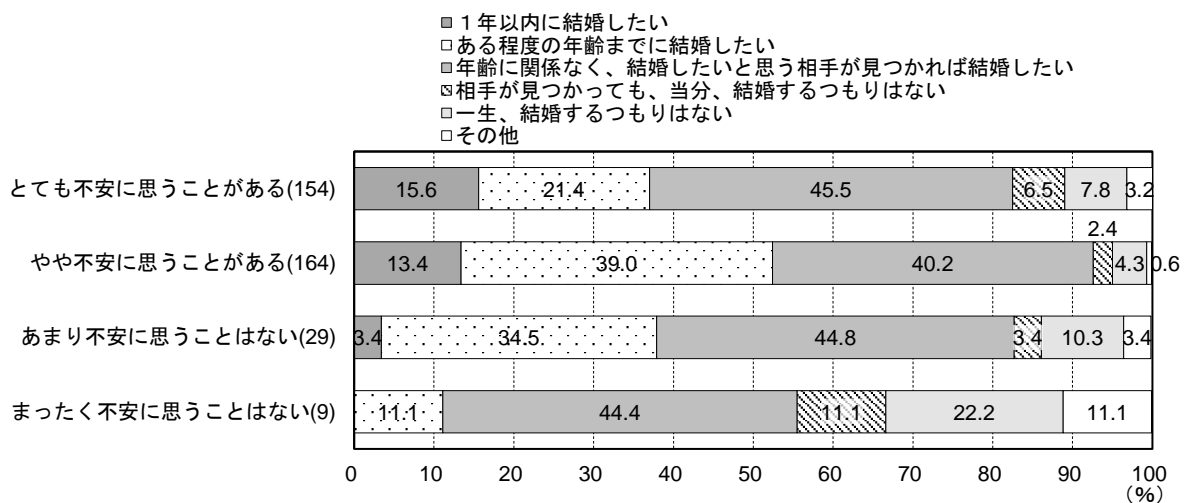
## ⑨妊娠・出産に関する不安

### (妊娠・出産に関する不安は女性の結婚意欲に強い影響を及ぼす)

女性に対して、身体への影響や医学面で妊娠・出産に関してどのくらい不安を持っているかを尋ね、結婚意欲への影響がみられるかを把握した(図Ⅱ-12)。

結果、「とても不安に思うことがある」と「やや不安に思うことがある」を比べると、「やや不安」に対して「とても不安」では結婚の「年齢志向」が少なく、「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない」「一生、結婚するつもりはない」が多くなっている。

図Ⅱ-12 妊娠・出産に関する不安別にみた結婚についての考え(女性、未婚者、単数)



クラメールの連関係数	0.1653
P値	0.0153

妊娠・出産に対する不安感が結婚意欲に及ぼす影響の強さを算出すると、「とても不安」に対して「やや不安」では結婚の「意欲強(年齢志向)」の出現率が1.9倍になる。妊娠・出産に関する不安は、女性の結婚意欲に対して強い影響を与えていると考えられる(表Ⅱ-8)。

表Ⅱ-8 妊娠・出産に対する不安と結婚意欲との関係(女性、未婚者)

妊娠・出産に対する不安：やや不安				妊娠・出産に対する不安：とても不安				オッズ比
N	意欲強	意欲弱	オッズ	N	意欲強	意欲弱	オッズ	
164	52.4	47.6	1.10	154	37.0	63.0	0.59	1.87



## 2. 理想の結婚年齢

### (1) 理想の結婚年齢

#### ①理想の結婚年齢の平均値

(理想の結婚年齢は男性 28.9 歳、女性 26.5 歳)

理想とする結婚年齢の平均値は、男性 28.9 歳、女性 26.5 歳と算出された(表Ⅱ-9)。岡山県における平成 29 年の平均初婚年齢は夫 30.2 歳、妻 28.7 歳であり、男性で 1.3 歳、女性 2.2 歳の差がみられる。理想年齢と実際に結婚した者の比較であるものの、理想と現実の差と捉えることもできる。

表Ⅱ-9 理想の結婚年齢の平均値(結婚年齢に理想がある者)  
(歳)

区分	全体		未婚者		既婚者	
	標本数	平均値	標本数	平均値	標本数	平均値
男	478	28.9	171	29.5	307	28.6
女	968	26.5	210	27.9	758	26.3

(注) それぞれ、県民局別男女人口(20-49 歳)、県民局別未婚者数(20-49 歳)、県民局別既婚者(20-49 歳)によるウエイトバック集計である

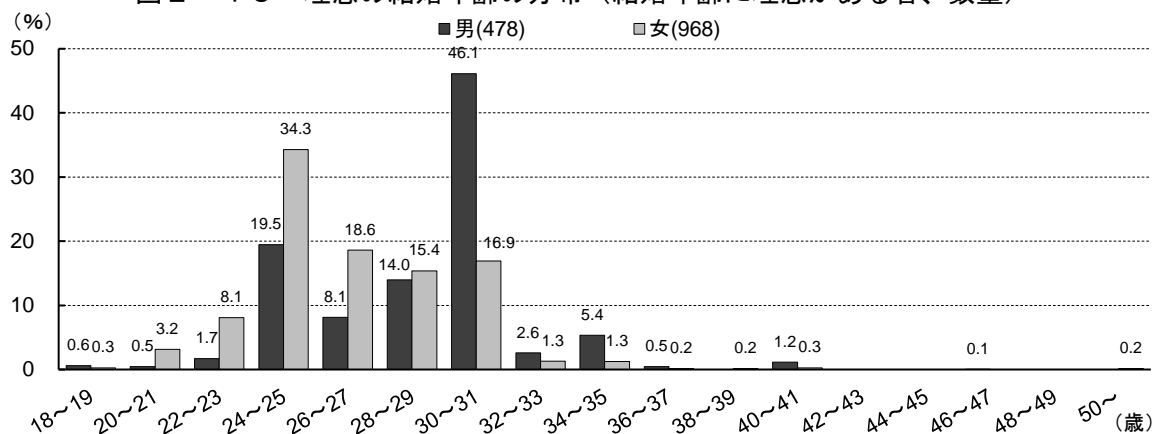
#### ②理想の結婚年齢の分布

(理想の結婚年齢の分布は正規分布ではない)

理想の結婚年齢は、男女で分布の形状が大きく異なっている(図Ⅱ-13)。また、男女とも、正規分布(真ん中が盛り上がり、両端に向けて徐々に低くなっていくような分布)とは分布の形状が大きく異なっており、平均値だけでは理想の結婚年齢の実態を把握することできない。

男性の理想は 30-31 歳が最も多く 46%を占めるものの、24-25 歳(20%)にもう一つピークを持っていることが特徴である。女性は、理想を 24-25 歳とする者が 34%と最も多い。次に 26-27 歳が多く、24 歳から 31 歳までを理想とする者が大半を占めている。

図Ⅱ-13 理想の結婚年齢の分布(結婚年齢に理想がある者、数量)



(注) 県民局別男女人口(20-49 歳)によるウエイトバック集計である

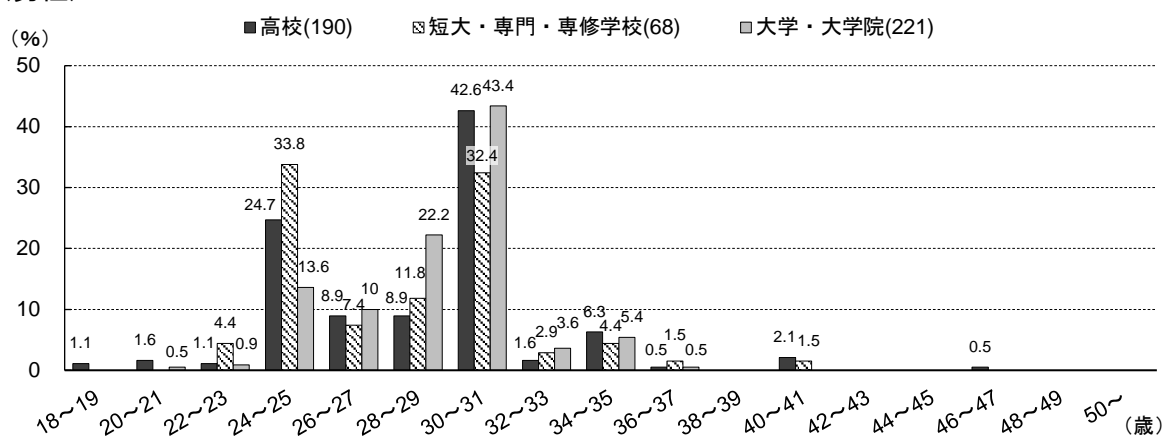
## (2) 理想の結婚年齢に影響を及ぼす要因

### (学歴が理想の結婚年齢に影響を及ぼす)

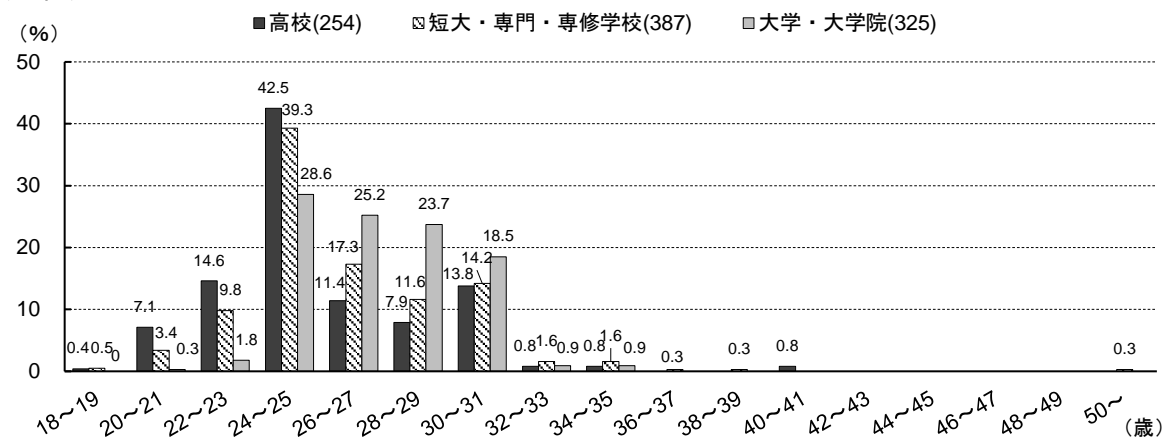
男性で理想の結婚年齢に二つのピークがみられることには、「高校」及び「短大・専門・専修学校」の卒業者に「24-25歳」を理想とする者が多いことが影響している(図Ⅱ-14)。ただし、「高校」でも「30-31歳」は「大学・大学院」と同程度に多く、理想年齢の平均値は「大学・大学院」より「高校」の方が高い。男性は30歳を結婚の一つの「節目」と考えている可能性がある。一方、女性は、「高校」「短大・専門・専修学校」に対して「大学・大学院」で26-27歳以降が多く、学歴により理想年齢が高くなる傾向が明らかである。「大学・大学院」は平均値も1歳高い(表Ⅱ-10)。

図Ⅱ-14 最終学歴別にみた理想の結婚年齢の分布(結婚年齢に理想がある者、数量)

(男性)



(女性)



表Ⅱ-10 最終学歴別にみた理想の結婚年齢の平均値(歳)

区分	理想の結婚年齢の平均値	
	男	女
高校	29.1	26.1
短大・専門・専修学校	26.8	26.0
大学・大学院	28.8	27.1

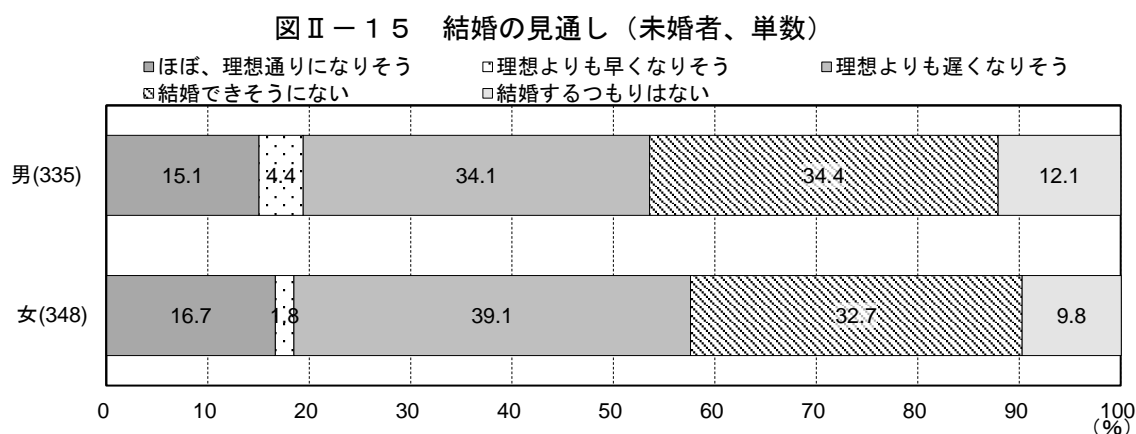
### 3. 結婚希望の実現

#### (1) 結婚の見通し

##### (結婚希望の実現が困難な者は男女とも3分の2を超える)

未婚者を対象に本人の結婚の見通しについて、結婚できそうかどうかや、理想と思う結婚年齢に比べてどうなりそうかを尋ねた。結婚希望の実現や晩婚化の歯止めという観点からみると、「結婚できそうにない」が男性34%、女性33%、「理想よりも遅くなりそう」が男性34%、女性39%となっている(図Ⅱ-15)。

「結婚できそうにない」「理想よりも遅くなりそう」を「結婚希望の実現困難」としてまとめると、両者を合計して男性69%、女性72%である。



(注) 県民局別の20-49歳未婚者人口によるウェイトバック集計である

##### (結婚の見通しに基づく予想出生率は男性1.19、女性1.25)

結婚の見通し別に理想の子ども数を集計して「結婚見通しに基づく未婚者予想出生率」を算出した(表Ⅱ-11)。

結果、男性の予想出生率は1.19、女性では1.25であり、未婚者の結婚が調査で得られた見通し通りになると、結婚できると予想する者の理想の子ども数を実現されたとしても出生率は極めて低い水準となる。未婚者の希望出生率は男性1.91、女性1.93であり、希望出生率と予想出生率の差は、未婚者の結婚見通しの厳しさを示している。

なお、現実の合計特殊出生率が予想出生率を上回るのは、未婚のとき「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」と考えている者に結婚する者が現れることや、もともと結婚希望を持っていた者の多くが既婚者となっており集計の対象となっていないためである。

表Ⅱ－１１ 未婚者の結婚見通しと理想の子ども数を元に算出した予想出生率  
(結婚見通しに基づく未婚者予想出生率)

(男性) N=337

理想の子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想の子ども数の回答割合	ほぼ、理想通りになりそう	0.02	0.63	0.30	0.02	0.00	0.02	1.00
	理想よりも早くなりそう	0.11	0.89	0.00	0.00	0.00	0.00	1.00
	理想よりも遅くなりそう	0.05	0.68	0.23	0.02	0.01	0.01	1.00
	結婚できそうにない	0.07	0.69	0.16	0.01	0.00	0.08	1.00
	結婚するつもりはない	0.05	0.35	0.08	0.03	0.00	0.50	1.00
② 理想の子ども数×①	ほぼ、理想通りになりそう	0.02	1.26	0.91	0.09	0.00	0.00	2.28
	理想よりも早くなりそう	0.11	1.78	0.00	0.00	0.00	0.00	1.89
	理想よりも遅くなりそう	0.05	1.35	0.70	0.10	0.04	0.00	2.24
	結婚できそうにない	-	-	-	-	-	-	-
	結婚するつもりはない	-	-	-	-	-	-	-
③ 構成比	ほぼ、理想通りになりそう	0.14	④=②×③					0.31
	理想よりも早くなりそう	0.03						0.05
	理想よりも遅くなりそう	0.37						0.82
	結婚できそうにない	0.35						-
	結婚するつもりはない	0.12						-
未婚者予想出生率 (④の合計)								1.19

(女性) N=350

理想の子ども数		1	2	3	4	5	0	合計
① 理想の子ども数の回答割合	ほぼ、理想通りになりそう	0.05	0.45	0.43	0.00	0.00	0.07	1.00
	理想よりも早くなりそう	0.00	0.57	0.14	0.00	0.00	0.29	1.00
	理想よりも遅くなりそう	0.06	0.57	0.30	0.02	0.00	0.06	1.00
	結婚できそうにない	0.11	0.50	0.26	0.02	0.00	0.11	1.00
	結婚するつもりはない	0.12	0.35	0.12	0.00	0.03	0.38	1.00
② 理想の子ども数×①	ほぼ、理想通りになりそう	0.05	0.90	1.29	0.00	0.00	0.00	2.24
	理想よりも早くなりそう	0.00	1.14	0.43	0.00	0.00	0.00	1.57
	理想よりも遅くなりそう	0.06	1.14	0.90	0.06	0.00	0.00	2.15
	結婚できそうにない	-	-	-	-	-	-	-
	結婚するつもりはない	-	-	-	-	-	-	-
③ 構成比	ほぼ、理想通りになりそう	0.17	④=②×③					0.37
	理想よりも早くなりそう	0.02						0.03
	理想よりも遅くなりそう	0.39						0.84
	結婚できそうにない	0.33						-
	結婚するつもりはない	0.10						-
未婚者予想出生率 (④の合計)								1.25

(注)「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」は、理想の子ども数の回答があっても予想出生率への寄与はゼロとした

(2) 結婚の見通しに影響を及ぼす要因

①結婚希望が実現できない理由

(「結婚できそうにない」理由は「相手と出会わない」「異性とうまく付き合えない」)

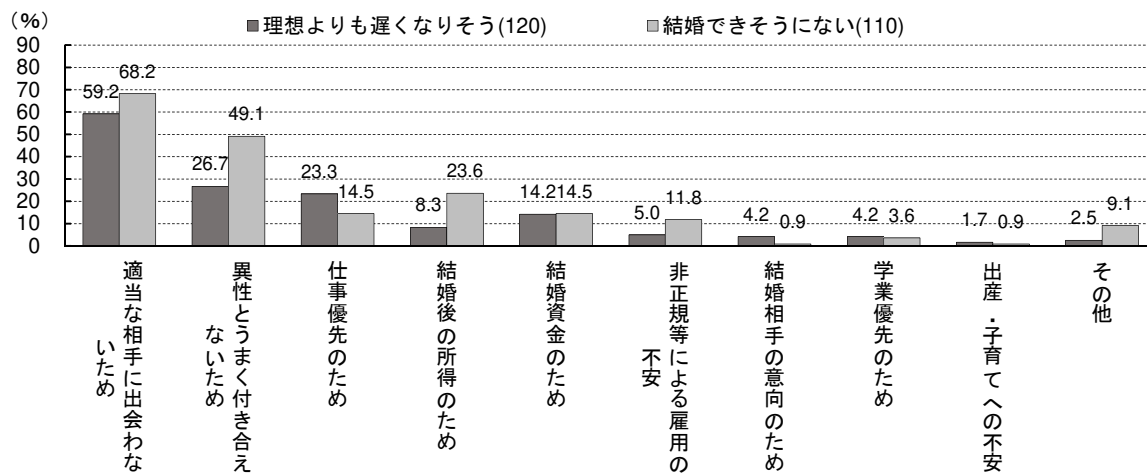
結婚の見通しに影響を与える要因をするため、「理想よりも遅くなりそう」や「結婚できそうにない」理由をみると、「適当な相手に出会わないため」が最も多い(図Ⅱ-16)。「結婚できそうにない」理由に注目すると男女とも「異性とうまく付き合えないため」が多くなり、半数近くに達する。同じく、「結婚できそうにない」理由に、「結婚後の所得のため」と「非正規等による雇用の不安」を挙げる者が、男性では前者が24%、後者が12%に上る。

一方、女性では、「出産や子育てへの不安」を「結婚できそうにない」理由とする者が10%いることが注目される。また、女性では「仕事優先のため」とする者が26%に上り、男性の15%に比べて多い。

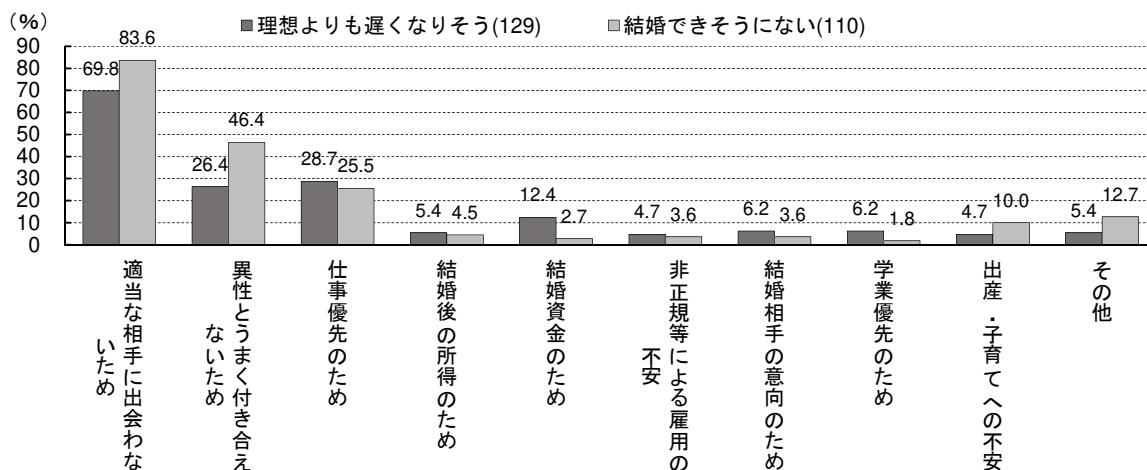
「結婚できそうにない」より「理想よりも遅くなりそう」の方で多くなる理由は、男性では「仕事優先のため」、女性では「結婚資金のため」などとなっている。

図Ⅱ-16 結婚見通し別にみた希望が実現しない理由(未婚者、複数)

(男性)



(女性)



## ②年齢

(理想年齢の実現期待は30歳代になると大幅減、結婚の実現期待は40歳代になると大幅減)

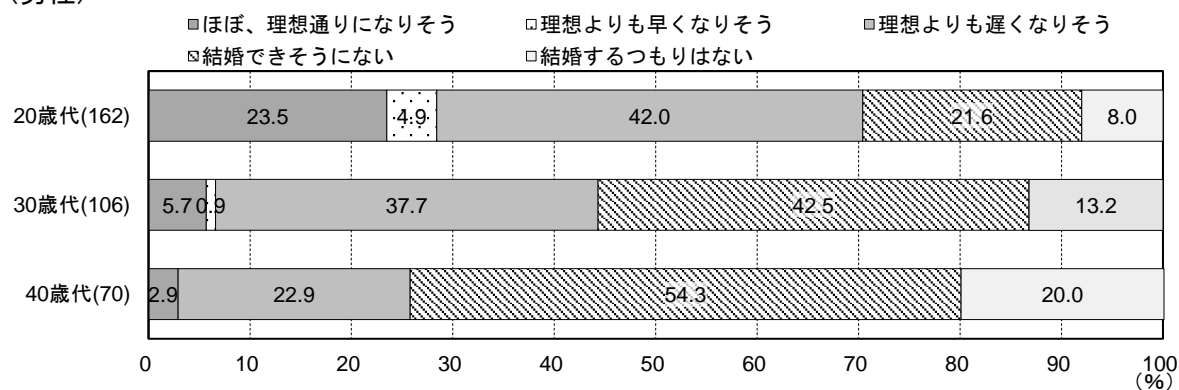
20歳代から30歳代にかけての変化の特徴は、男女とも「ほぼ、理想通りになりそう」が大きく減少することである(図Ⅱ-17)。「ほぼ、理想通りになりそう」は、男性では20歳代から30歳代にかけて24%から6%に変化する。女性では26%から5%へと減少する。

30歳代から40歳代にかけての変化は、「理想よりも遅くなりそう」が大きく減少することが特徴である。特に、女性では、30歳代は40%であるが、40歳代は9%である。この変化に伴って、「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」が大きく増加する。

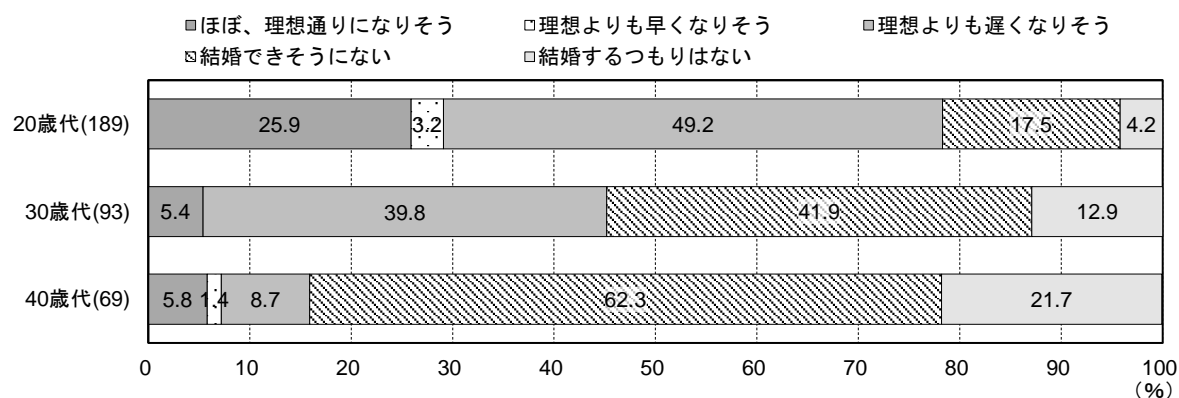
しかしながら、40歳代の結婚意欲をみると、「年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい」が大半を占めており、結婚意欲を失っていない者は多いとみられる(図Ⅱ-2)。

図Ⅱ-17 年齢階層別にみた結婚見通し(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



③交際状況

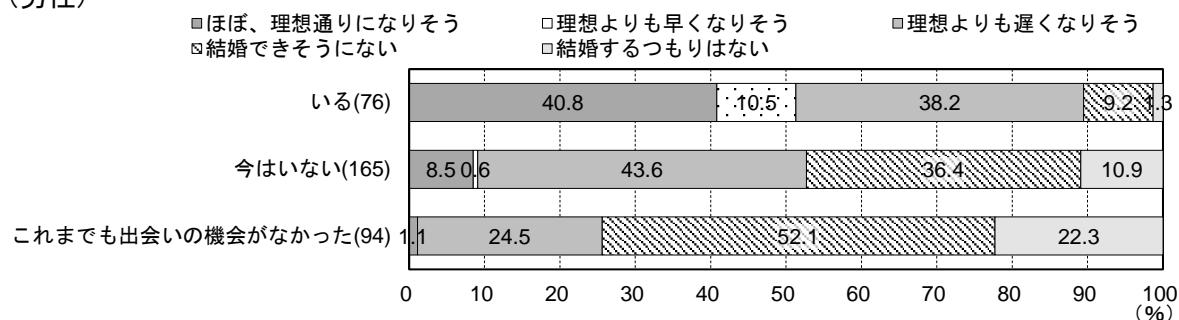
(交際経験は結婚見通しに対して極めて強い影響を及ぼす)

現在・過去の交際状況が結婚の見通しに強い影響を与えている(図Ⅱ-18)。とりわけ、男性の「結婚できそうにない」は、「これまで出会いの機会がなかった」の者では52%に達し、現在「いる」だけでなく「今はいない」と比較しても差が大きい。

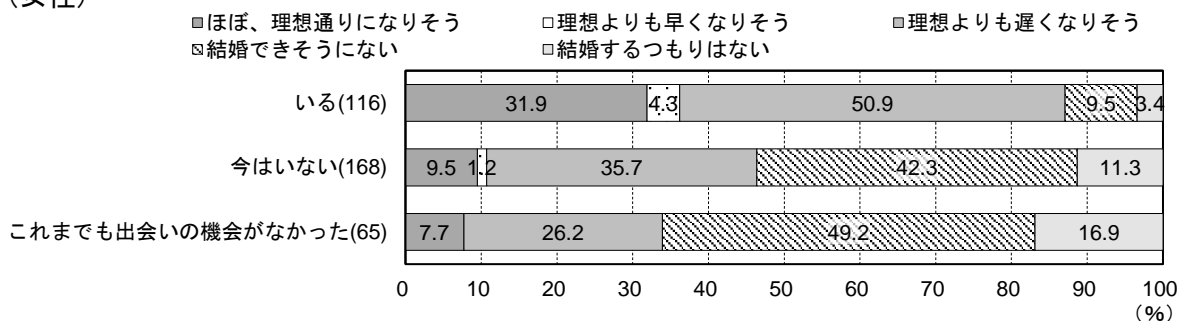
女性では、交際相手が「今はいない」で「結婚できそうにない」が42%に達し、男性に比べて厳しい捉え方をしている者が多い。

図Ⅱ-18 交際状況別にみた結婚見通し(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.4265	0.3271
P値	0.0000	0.0000

交際状況の「いる」「今はいない」を「交際経験あり」、「これまで出会いの機会がなかった」を「交際経験なし」として二区分にした。結婚の見通しは、「ほぼ、理想通りになりそう」から「理想よりも遅くなりそう」までを「結婚」、残りを「非婚」とした。

その結果、「交際経験あり」では「交際経験なし」に比べて、男性では「結婚」の出現率が5.3倍となり、交際経験が結婚見通しに極めて強く影響している。また、女性でも3.3倍に達する。(表Ⅱ-12)

表Ⅱ-12 交際状況の結婚見通しに対する影響の強さ(未婚者)

性別	交際経験：あり				交際経験：なし				オッズ比
	N	結婚	非婚	オッズ	N	結婚	非婚	オッズ	
男	241	64.3	35.7	1.80	94	25.5	74.5	0.34	5.26
女	284	63.0	37.0	1.70	65	33.8	66.2	0.51	3.33

#### ④所得及び労働状態

##### i) 所得の捉え方

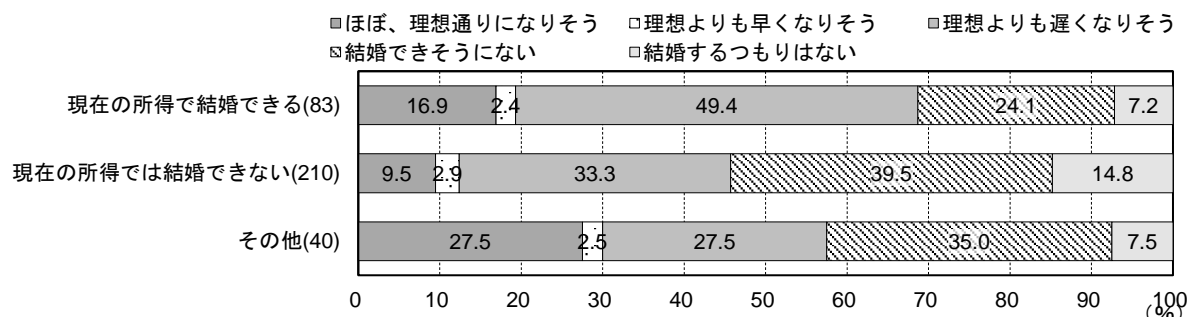
(男性では所得が結婚見通しにかなり強く影響)

男性では、自分の所得について「現在の所得では結婚できない」と考える者は、結婚見通しについて「結婚できそうにない」が40%に達し、多くなっている(図Ⅱ-19)。また、「結婚するつもりはない」も15%に上る。

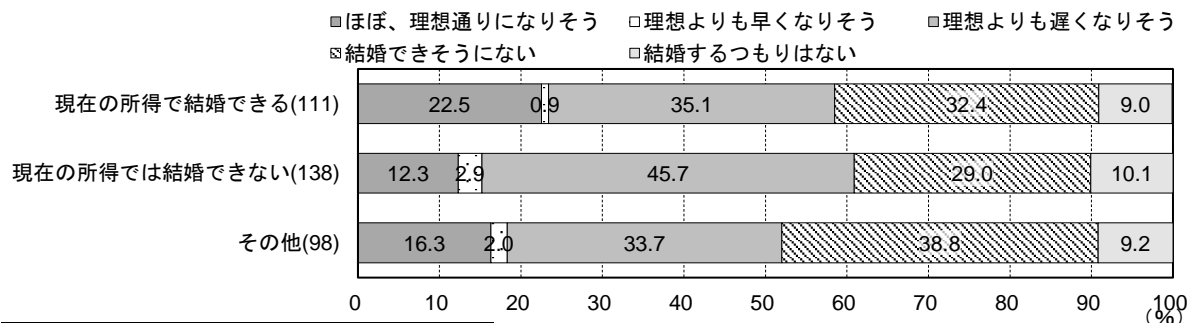
女性では、「現在の所得では結婚できない」と考える者は、結婚見通しについて「理想より遅くなりそう」が46%と多い。ただし、全体的には、男性ほど所得の捉え方と結婚見通しの間にはっきりした関係はみられない。

図Ⅱ-19 所得の捉え方別にみた結婚見通し(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1811	0.1173
P値	0.0052	0.2980

所得の捉え方を「結婚できる」と「結婚できない」の二区分にすると、現在の所得で「結婚できる」であると、現在の所得で「結婚できない」に対して、結婚見通しの「結婚」の出現率が男性では2.6倍になる(表Ⅱ-13)。

表Ⅱ-13 所得の捉え方の結婚見通しに対する影響の強さ(未婚の就業者)

性別	所得の捉え方：結婚できる				所得の捉え方：結婚できない				オッズ比
	N	結婚	非婚	オッズ	N	結婚	非婚	オッズ	
男	83	68.7	31.3	2.19	210	45.7	54.3	0.84	2.60
女	111	58.6	41.4	1.41	138	60.9	39.1	1.56	0.91



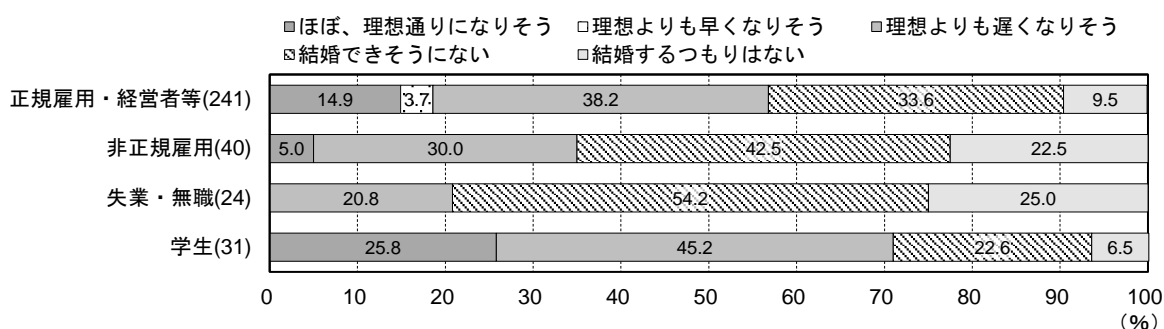
ii) 労働状態

(正規・非正規の別は男女の結婚見通しに影響を与える)

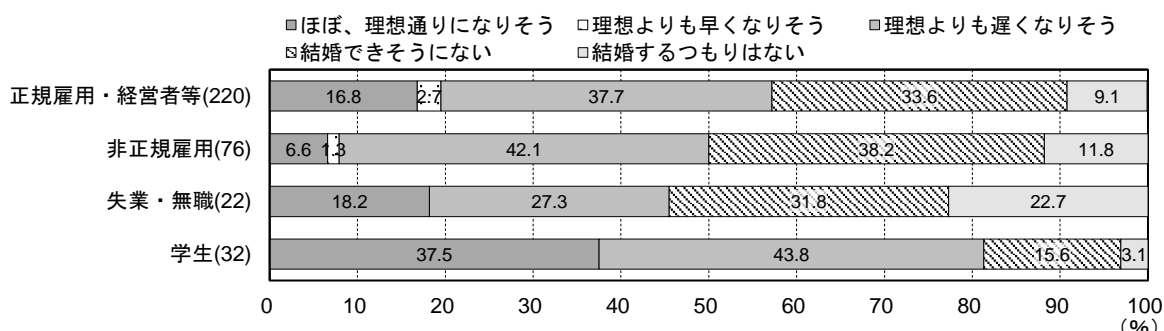
男性の「非正規雇用」では、「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」といった「非婚」につながる見通しをする者が65%を占める(図Ⅱ-20)。労働状態は女性にも影響を与えており、「非正規雇用」では、「正規雇用・経営者等」と比べて「理想通りになりそう」が減り、「理想よりも遅くなりそう」「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」が増加する。

図Ⅱ-20 労働状態別にみた結婚見通し(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1705	0.1551
P値	0.0036	0.0136

未婚の就業者を対象にして、労働状態のうち「正規雇用・経営者等」と「非正規雇用」の二つを対象にして結婚見通しに対する影響の強さを算出すると、男性では「正規雇用・経営者等」であると、「非正規雇用」に対して結婚見通しの「結婚」の出現率が2.5倍になる(表Ⅱ-14)。女性は1.3倍であり、弱い影響力が認められる。

表Ⅱ-14 労働状態の結婚見通しに対する影響の強さ(未婚の就業者)

(件、%、倍)

性別	労働状態：正規雇用・経営者等			労働状態：非正規雇用			オッズ比
	N	結婚	非婚	N	結婚	非婚	
男	241	56.8	43.2	40	35.0	65.0	2.45
女	220	57.3	42.7	76	50.0	50.0	1.34

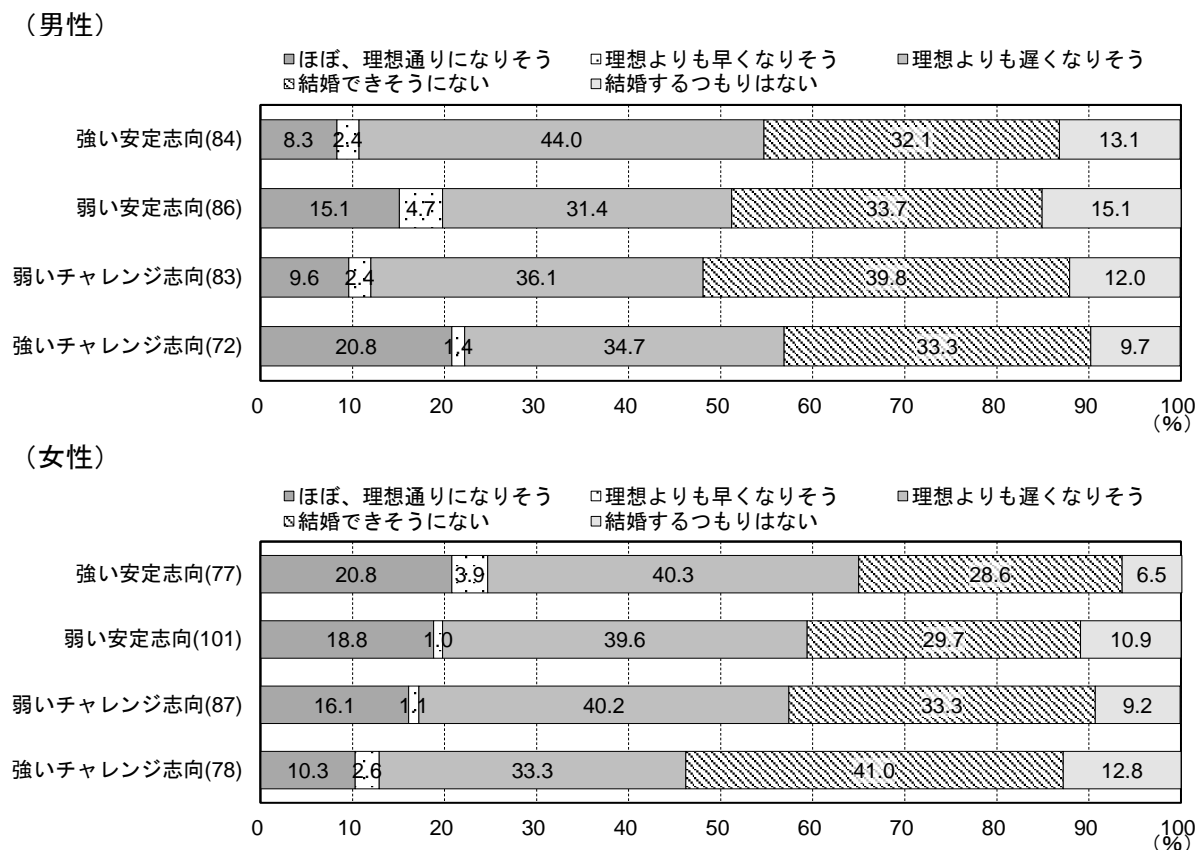
## ⑤ライフコース及びワーク・ライフ・バランス

### i) ライフコースの志向性

(ライフコースの志向性は女性の結婚見通しに影響する)

「安定志向」か「チャレンジ志向」というライフコースの志向別に結婚見通しをみたところ、女性において、ライフコースの「チャレンジ志向」が強くなるほど、「理想通りになりそう」が減って「結婚できそうにない」が増加する傾向がみられる(図Ⅱ-21)。

図Ⅱ-21 ライフコースの志向別にみた結婚見通し(未婚者、単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1069	0.0988
P値	0.5167	0.6129

ライフコースの志向性を「安定」と「チャレンジ」に分けて結婚見通しに対する影響の強さを算出すると、女性では「チャレンジ」から「安定」になると「結婚」の見通しの出現率が1.5倍になる(表Ⅱ-15)。

表Ⅱ-15 ライフコースの志向性の結婚見通しに対する影響の強さ(未婚者)

(件、%、倍)

性別	ライフコースの志向性：安定			ライフコースの志向性：チャレンジ			オッズ比
	N	結婚	非婚	N	結婚	非婚	
男	170	52.9	47.1	155	52.3	47.7	1.09
女	178	61.8	38.2	165	52.1	47.9	1.09

ii) ワーク・ライフ・バランス

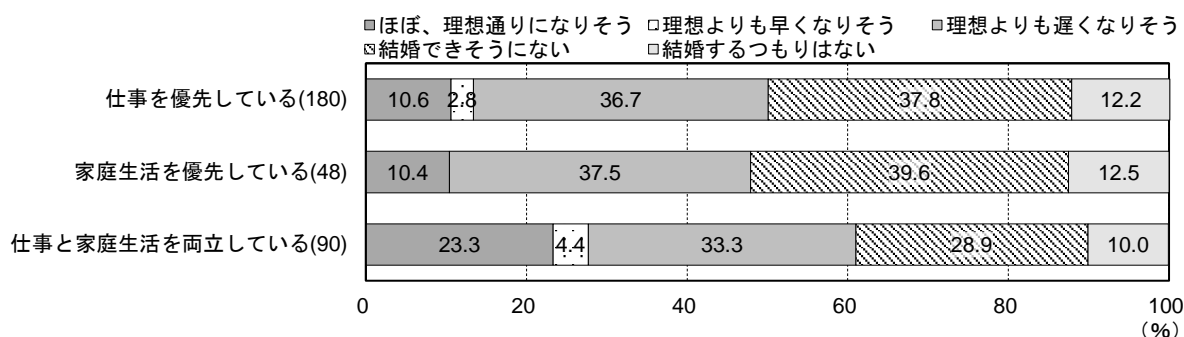
(結婚時のワーク・ライフ・バランスの予想が未婚者の結婚見通しに強い影響を与える)

結婚した場合には仕事と家庭生活のどちらを優先しているかというワーク・ライフ・バランス別に、未婚者の結婚見通しを集計した。

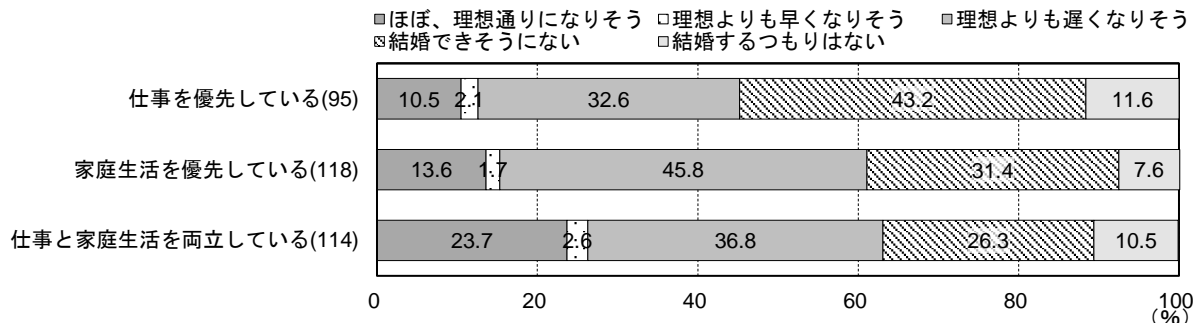
その結果、男性では、「仕事と家庭生活を両立している」と考える者では、結婚見通しが「理想通りになりそう」が他に比べて多く、「結婚できそうにない」が少なくなっている(図Ⅱ-22)。女性では、「仕事と家庭生活を両立している」とする者は、結婚見通しが「理想通りになりそう」が多く、「結婚できそうにない」とともに「理想よりも遅くなりそう」も少なくなる。

図Ⅱ-22 ワーク・ライフ・バランス別にみた結婚見通し(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1361	0.1496
P値	0.1611	0.0667

ワーク・ライフ・バランスの予想を、「仕事あるいは家庭生活優先」と「仕事と家庭生活の両立」に分けると、男性では「両立」であるとどちらかを優先するよりも「結婚」の見通しの出現率が1.6倍になる(表Ⅱ-16)。女性では1.5倍であった。

表Ⅱ-16 ワーク・ライフ・バランス(現実)の結婚見通しに対する影響の強さ(未婚者)

(件、%、倍)

性別	ワーク・ライフ・バランス：仕事と家庭生活の両立				ワーク・ライフ・バランス：仕事あるいは家庭生活優先				オッズ比
	N	結婚	非婚	オッズ	N	結婚	非婚	オッズ	
男	90	61.1	38.9	1.57	228	49.6	50.4	0.98	1.60
女	114	63.2	36.8	1.71	213	54.0	46.0	1.17	1.46

## ⑥妊娠・出産に関わる不安

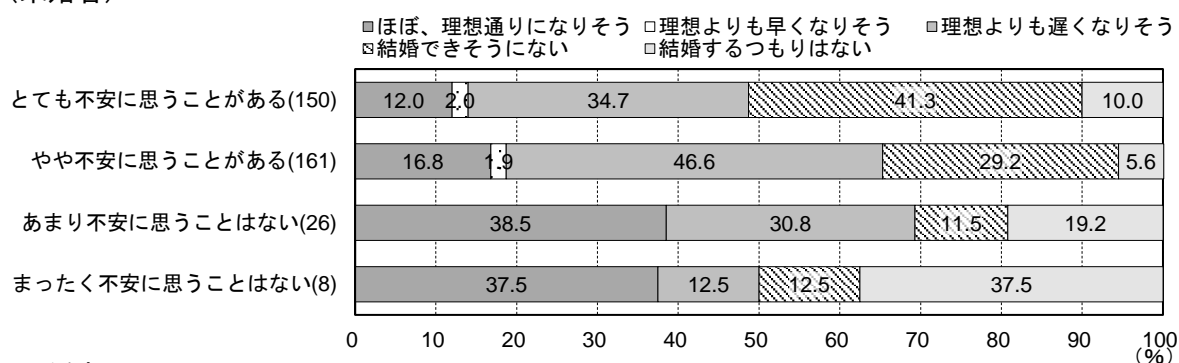
### (妊娠・出産に関わる不安は未婚時の結婚見通しに影響を及ぼす)

女性の妊娠・出産に関わる不安と結婚の見通しとの関係を見ると、未婚者では、「とても不安に思うことがある」と「結婚できそうにない」が41%に達し、他に比べて回答が多い(図Ⅱ-23)。既婚者は、結婚前に「あまり不安はなかった」から「とても不安だった」にかけて徐々に「結婚できそうにない」と思っていた」が増加している。

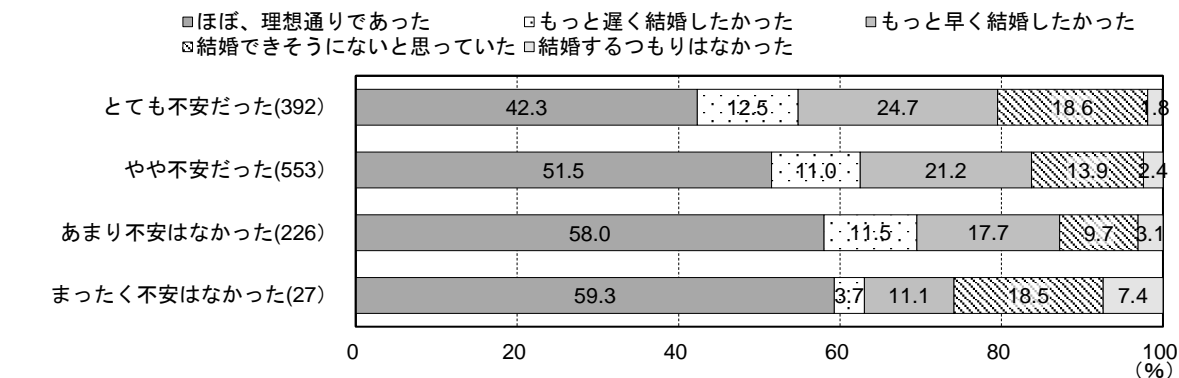
女性では、未婚時における妊娠・出産に関わる不安が、「結婚できそうにない」などの結婚の見通しに影響を与えていると考えられる。

図Ⅱ-23 妊娠・出産に関わる不安別にみた結婚の見通し(女性、単数)

#### (未婚者)



#### (既婚者)



項目	未婚者	既婚者
クラメールの連関係数	0.1906	0.0869
P値	0.0002	0.0074

妊娠・出産に関わる不安の有無により結婚見通しを算出すると、不安「なし」であると「あり」に対して「結婚」の見通しの出現率が未婚者で1.4倍、既婚者で1.3倍になる(表Ⅱ-17)。弱いながら結婚見通しに対する影響が認められる。

表Ⅱ-17 妊娠・出産に関わる不安の結婚見通しに対する影響の強さ(女性)

(件、%、倍)

性別	妊娠・出産に関わる不安：なし				妊娠・出産に関わる不安：あり				オッズ比
	N	結婚	非婚	オッズ	N	結婚	非婚	オッズ	
未婚者	34	64.7	35.3	1.83	311	57.2	42.8	1.34	1.37
既婚者	253	85.8	14.2	6.03	253	82.0	18.0	4.56	1.32

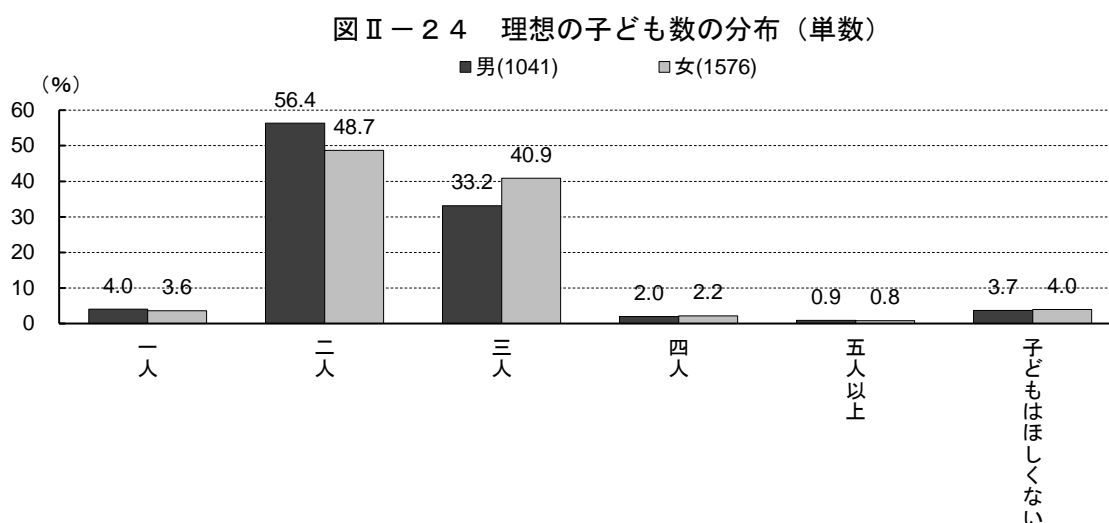
## 4. 理想の子ども数

### (1) 理想の子ども数

(理想の子ども数「二人」が約半数を占める)

すべての回答者を対象に理想の子ども数を集計すると「二人」が最も多く、男性で56%、女性で49%であった(図Ⅱ-24)。「三人」は「二人」を下回り、男性33%、女性41%である。「三人」は女性の方が男性より8ポイント多く、男女の違いが表れている。

「一人」は、男女とも4%に過ぎない。また、「子どもはほしくない」も男女とも4%であった。



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

(すべての者が結婚し、理想の子ども数を実現したときの出生率は2.3に達する)

わが国の場合、ほとんどの子どもは結婚したカップルから生まれるため、理想の子ども数の実現は結婚が前提になるものの、調査で得られた理想の子ども数だけに基づき出生率を算出する(あるいはすべての男女が結婚すると仮定する)と、男性2.30、女性2.39となる(表Ⅱ-18)。回答者の理想の子ども数は人口置換水準(2.07)を上回る。

実際は、結婚を希望しない者、結婚希望や理想の子ども数を実現できない者がいるため現実の出生率は低下していく。したがって、人口置換水準を満たすためには、この理想の子ども数がさらに高い水準でなければならないという見方もできる。

表Ⅱ-18 理想の子ども数に基づく出生率の算出

		(人、%)							
①	理想の子ども数	1	2	3	4	5	0	合計	
②	構成比	男性	4.0	54.0	34.6	2.1	1.1	4.1	100.0
		女性	3.3	47.5	42.0	2.4	1.1	3.7	100.0
③	①×②	男性	0.040	1.080	1.038	0.084	0.055	0	2.30
		女性	0.033	0.950	1.260	0.096	0.055	0	2.39

## (2) 理想の子ども数に影響を及ぼす要因

### ①子どもがほしい・ほしくない理由

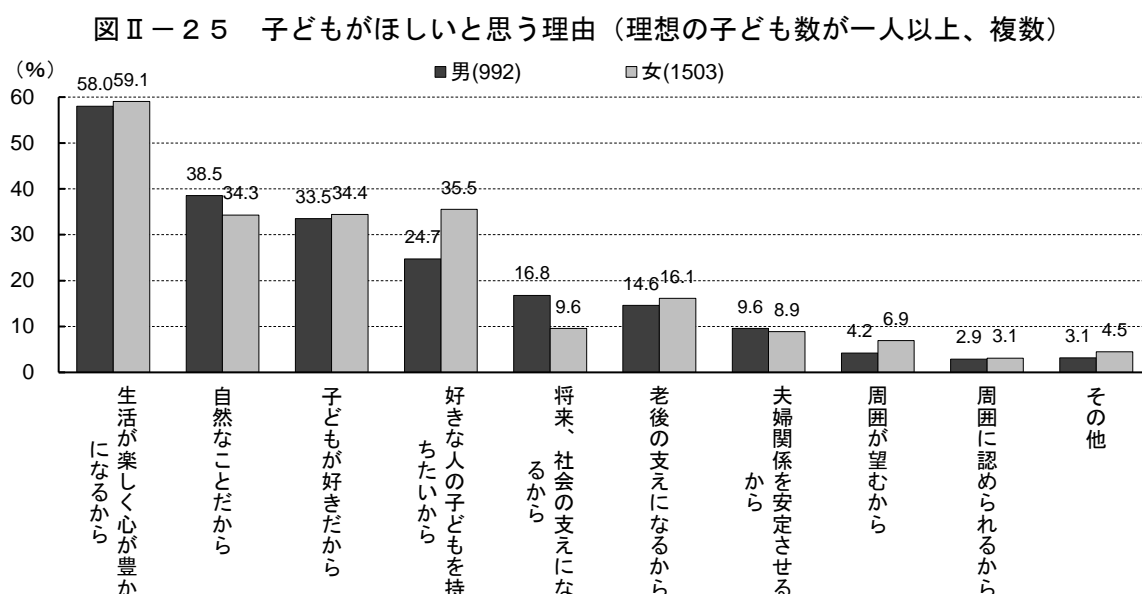
#### i) 子どもがほしいと思う理由

(最も多い理由は「生活が楽しく心が豊かになるから」)

理想の子ども数が一人以上の者を対象に子どもがほしいと思う理由を把握したところ、「生活が楽しく心が豊かになるから」が最も多く、男女とも60%近い(図Ⅱ-25)。

二番目に、男性では「自然なことだから」が39%(女性34%)と多いが、女性では「好きな人の子どもを持ちたいから」が36%(男性25%)と多くなっている。「子どもが好きだから」も男女とも30%を超え、回答が多い理由となっている。

これらの回答の多くは、子どもを持つことがもたらす幸福感を表していると考えられる。



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

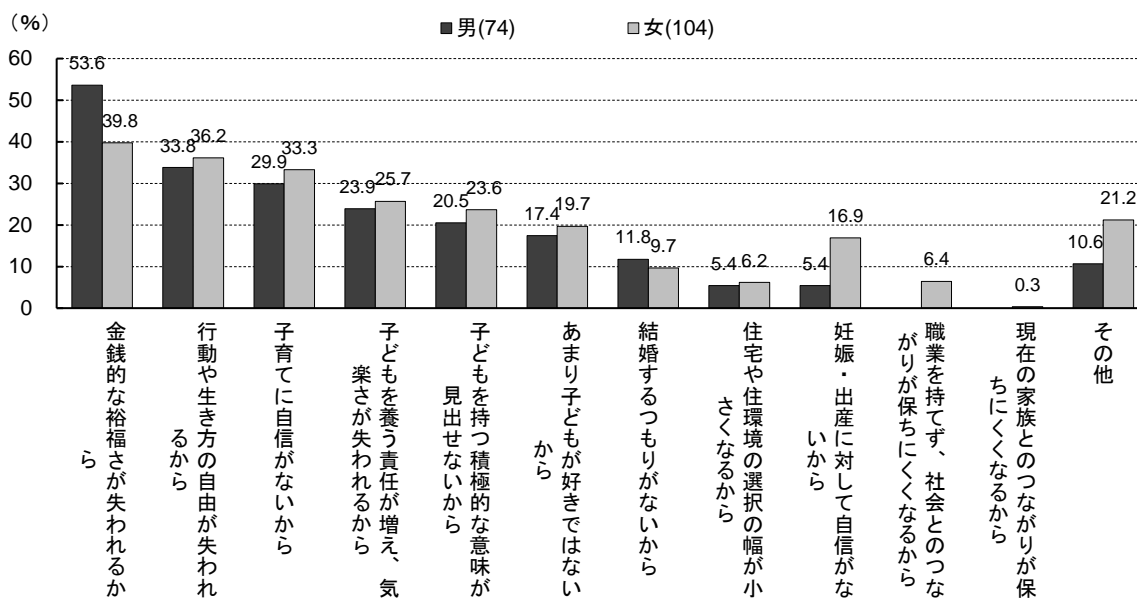
#### ii) 子どもがほしくない・ほしい子ども数が一人である理由

(「金銭的な裕福さが失われるから」が最も多い)

「子どもはほしくない」、あるいは理想の子ども数を「一人」と回答した者に、その理由を尋ねたところ、「金銭的な裕福さが失われるから」が男性54%、女性40%に上っている(図Ⅱ-26)。この他では、「行動や生き方の自由さが失われるから」「子育てに自信がないから」などの理由が多い。

理由の順位に男女で差はあまりみられないものの、全般にみて、男性は「金銭的な裕福さが失われるから」と他の理由との差が大きく、一方の女性の理由は男性に比べ多様である。特に、女性で「妊娠・出産に対して自信がないから」が17%に達していることは注目される。

図Ⅱ－２６ 子どもがほしくない・ほしい子ども数が一人である理由  
(子どもがほしくない、もしくは理想の子ども数が一人、複数)



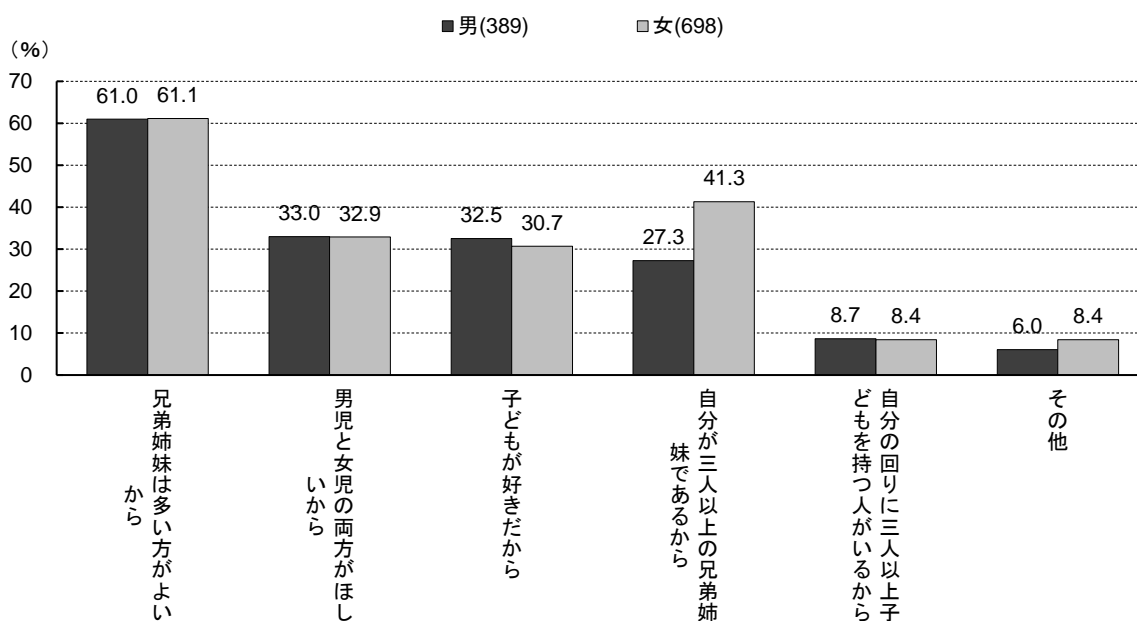
(注) 県民局別男女人口 (20-49 歳) によるウエイトバック集計である

iii) 三人以上の子どもがほしいと思う理由

理想の子ども数を「三人」以上とした者の理由をみると、「兄弟姉妹は多い方がよいから」が男女とも 60%に達する (図Ⅱ－２７)。

自分の経験や他者からの影響を示す理由では、「自分が三人以上の兄弟姉妹であるから」が男性 28%、女性 41%であり、男女の違いが表れている。「自分の回りに三人以上子どもを持つ人がいるから」は男性 9%、女性 8%であった。

図Ⅱ－２７ 三人以上の子どもがほしい理由 (理想の子ども数が三人以上、複数)



(注) 県民局別男女人口 (20-49 歳) によるウエイトバック集計である

## ②初婚年齢

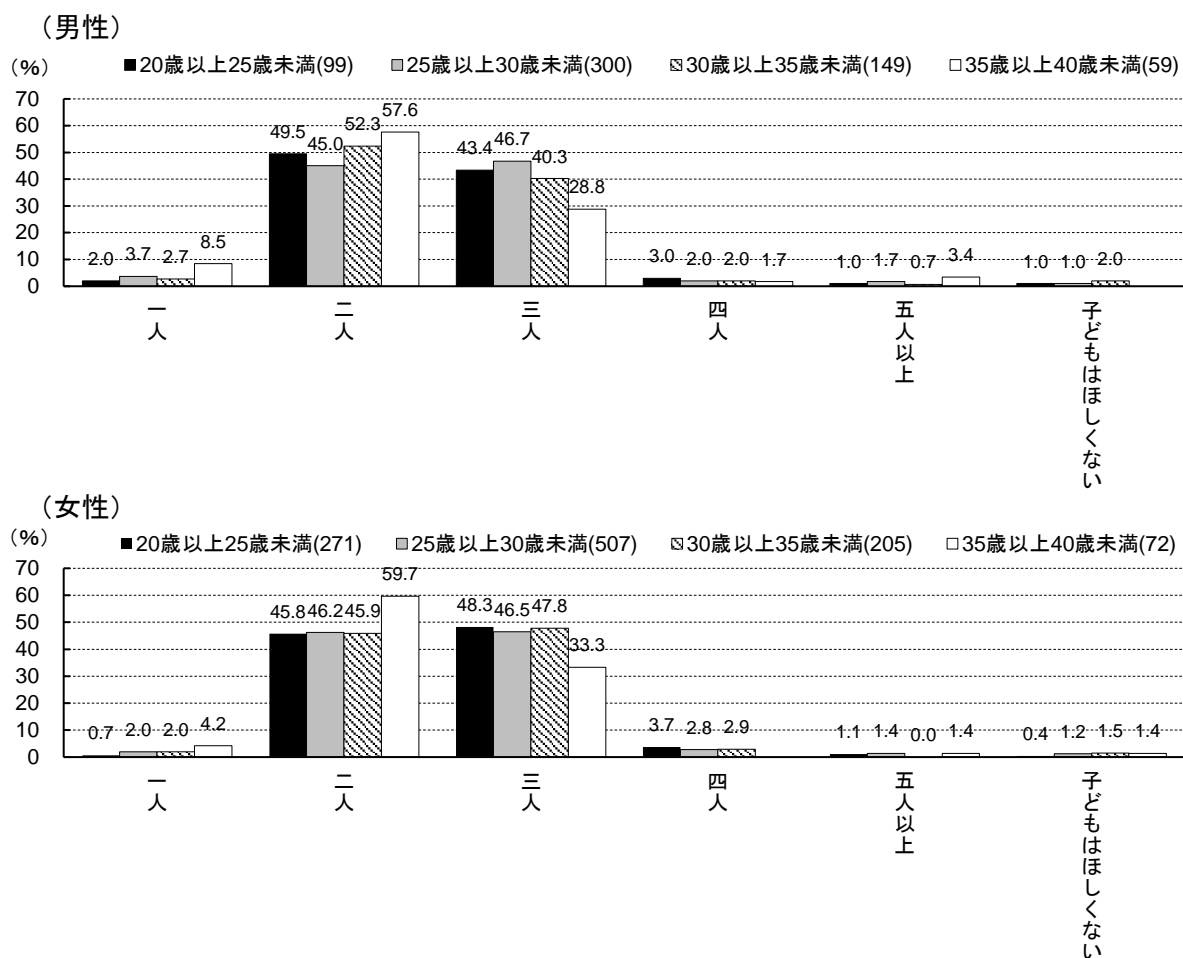
### (結婚年齢は理想の子ども数に影響を及ぼす)

既婚者を対象に、初婚年齢と理想の子ども数との関係を見ると、男性では30歳以上になると「三人」が減少し、「二人」が増加するようになる(図Ⅱ-28)。

女性は、35歳未満では「二人」と「三人」がほぼ同数であるが、35歳以上になると「三人」が大きく減少し、反対に「二人」や「一人」が増加する。

男女とも結婚年齢が子ども数に理想レベルで影響しており、特に男性の方で関係がはっきり表れる。

図Ⅱ-28 初婚年齢別にみた理想の子ども数(既婚者、単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1052	0.0882
P値	0.0838	0.0164



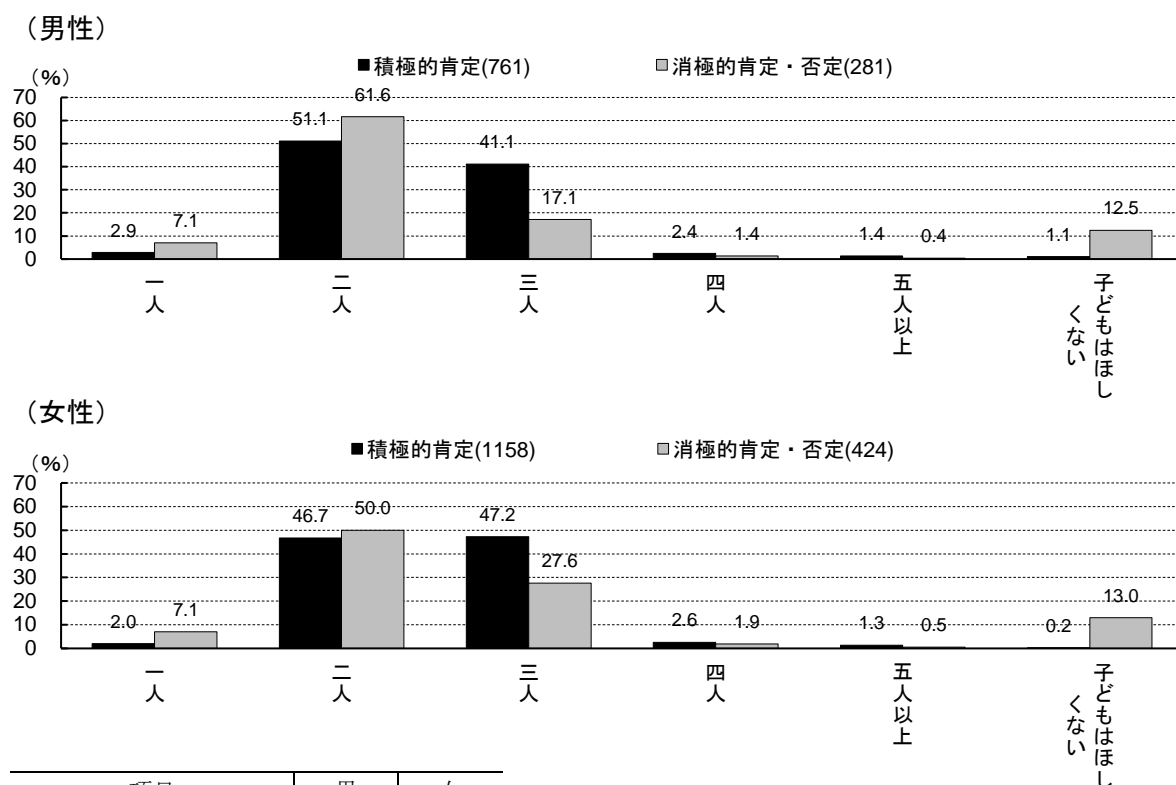
③子ども観及び子どもに対する感受性

i) 子ども観

(子ども観は男性の理想の子ども数に極めて強い影響を及ぼす)

「子どもがいたら生活が楽しくなる」という子ども観によって理想の子ども数にどのくらいの差が生じるかをみた。「子どもがいたら生活が楽しくなる」について「とてもそう思う」「そう思う」を「積極的肯定」、「どちらかと言えばそう思う」から「まったくそう思わない」までを「消極的肯定・否定」とすると、男女とも理想の子ども数の「三人」に大きな差が現れる(図Ⅱ-29)。

図Ⅱ-29 子ども観別にみた理想の子ども数(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1636	0.0854
P値	0.0000	0.0007

子ども観の理想の子ども数への影響の強さをみるため、理想の子ども数を「三人以上」と「0～2人」に二区分すると、男性では、子ども観が「積極的肯定」であると、「消極的肯定・否定」に対して「三人以上」の出現率が3.5倍になる。女性では2.4倍である。特に、男性の理想の子ども数に対して子ども観は極めて強い影響力を持っている。(表Ⅱ-19)

表Ⅱ-19 子ども観の理想の子ども数への影響の強さ

(件、%、倍)

性別	子ども観：積極的肯定			子ども観：消極的肯定・否定			オッズ比
	N	三人以上	なし～二人	N	三人以上	なし～二人	
男	761	44.9	55.1	281	18.9	81.1	3.50
女	1158	51.1	48.9	424	30	70	2.44

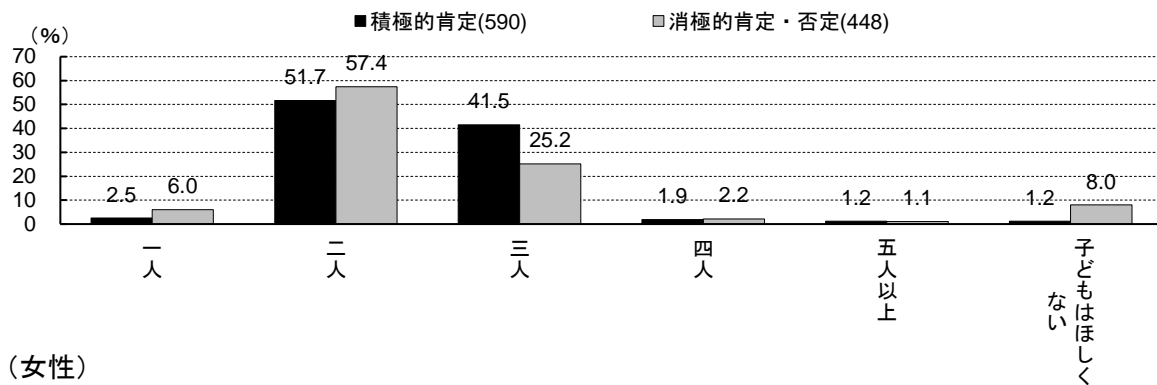
ii) 子どもに対する感受性

(子どもに対する感受性も男性の理想の子ども数に強い影響を及ぼす)

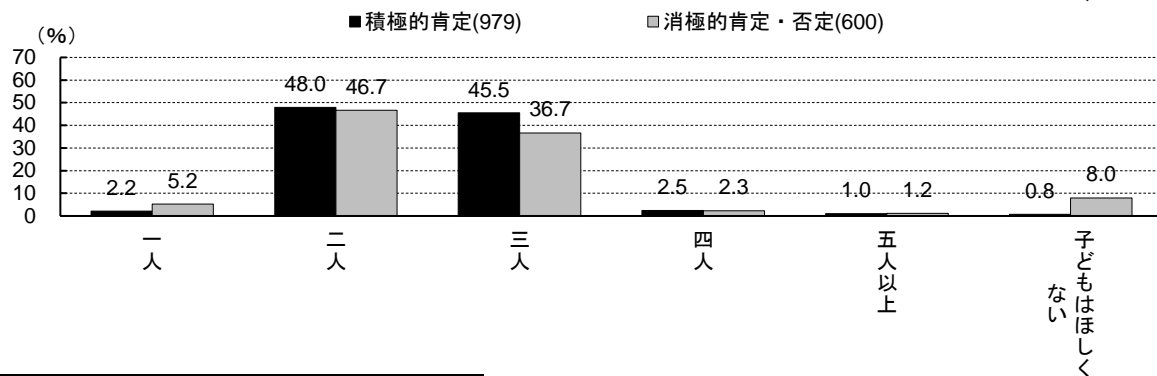
「小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う」という子どもに対する感受性の影響をみるため、子どもに対する感受性を「積極的肯定」と「消極的肯定・否定」に分け、理想の子ども数を集計すると、男性では「積極的肯定」と「消極的肯定・否定」では「三人」に16ポイントの差が生じる(図Ⅱ-30)。女性の「三人」における差は9ポイントであるが、女性はもともと「三人」の回答が多い。

図Ⅱ-30 子どもに対する感受性別にみた理想の子ども数(単数)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2360	0.2115
P値	0.0000	0.0000

子どもに対する感受性の理想の子ども数への影響の強さをみると、男性では、感受性が「積極的肯定」であると「消極的肯定・否定」に対して「三人以上」の出現率が2.0倍になる(表Ⅱ-20)。女性では1.4倍であり、男性の方が理想の子ども数に対してかなり強い影響が表れている。

表Ⅱ-20 子どもに対する感受性の理想の子ども数への影響の強さ

(件、%、倍)

性別	子どもに対する感受性：積極的肯定				子どもに対する感受性：消極的肯定・否定				オッズ比
	N	三人以上	なし～二人	オッズ	N	三人以上	なし～二人	オッズ	
男	590	44.6	55.4	0.81	448	28.6	71.4	0.40	2.01
女	979	48.9	51.1	0.96	600	40.2	59.8	0.67	1.42

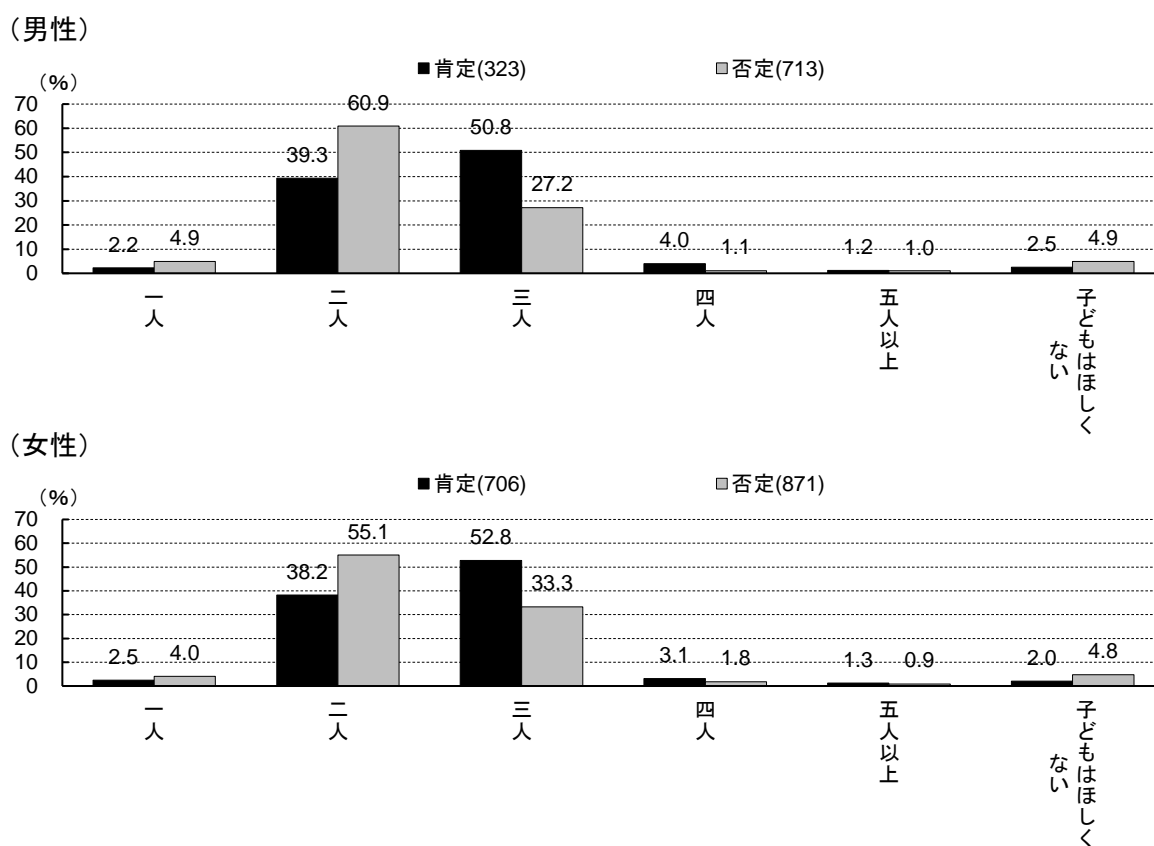
iii) 多子経験

(多子経験は男性の理想の子ども数に極めて強い影響を及ぼす)

調査では、出生が他者の行動の影響を受けるかどうか把握するため「身近に三人以上子どもを持つ夫婦が多かった」かを尋ねた。この質問を「多子経験」と言い表し、「とてもそう思う」から「どちらかと言えばそう思う」を「肯定」、「どちらかと言えばそう思わない」から「まったくそう思わない」を否定としてまとめ、理想の子ども数との関係をみた(図Ⅱ-31)。

結果、男性では「肯定」であると「三人」が51%に達し、「否定」との差は24ポイントと大きい。女性も「肯定」では「三人」が53%に達し、「否定」との差は20ポイントになる。

図Ⅱ-31 多子経験別にみた理想の子ども数(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2626	0.2154
P値	0.0000	0.0007

多子経験が理想の子ども数に及ぼす影響力は、男性では「肯定」であると「否定」に対して「三人以上」の出現率が3.1倍になる(表Ⅱ-21)。女性も2.4倍になる。

表Ⅱ-21 多子経験の理想の子ども数への影響の強さ

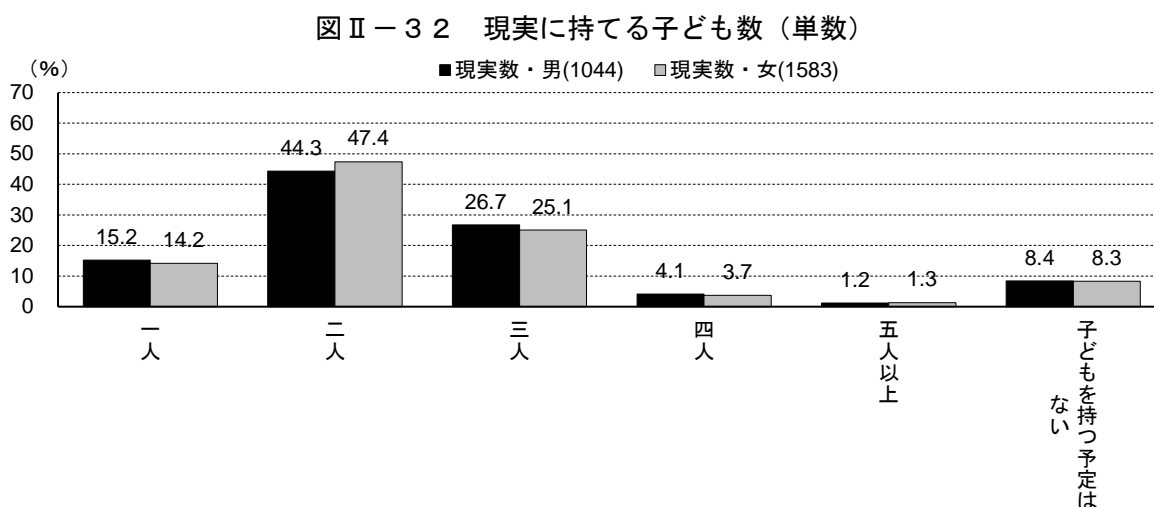
性別	多子経験：肯定				多子経験：否定				オッズ比
	N	三人以上	なし~二人	オッズ	N	三人以上	なし~二人	オッズ	
男	323	56	44	1.27	713	29.3	70.7	0.41	3.07
女	706	57.2	42.8	1.34	871	36.1	63.9	0.56	2.37

## 5. 現実に持てる子ども数

### (1) 現実に持てる子ども数

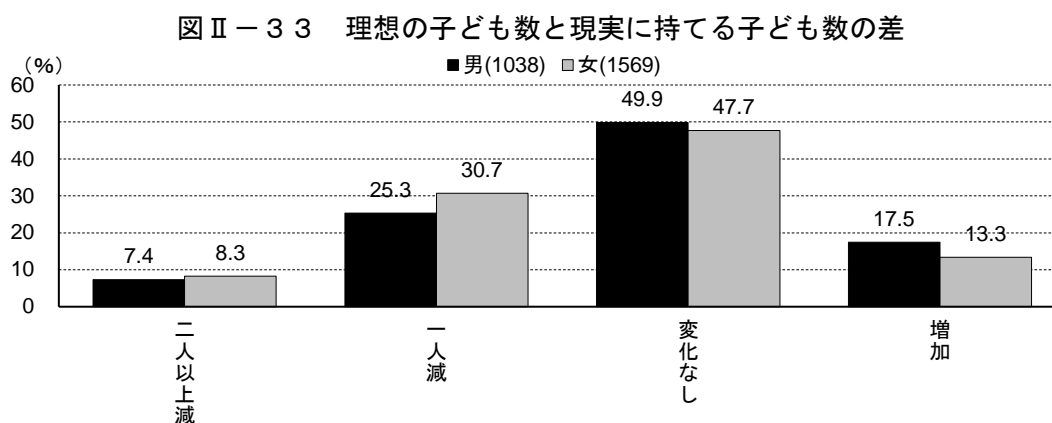
(現実に持てる子ども数は理想から減少が男性 33%、女性 39%)

すべての回答者を対象に現実に持てる子ども数の回答を集計すると「二人」が最も多く、男性で 44%、女性で 47%である(図Ⅱ-32)。「三人」は男性 27%、女性 25%であった。「一人」は、男性 15%、女性 14%であり、「子どもを持つ予定はない」は男女とも 8%であった。



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

現実に持てる子ども数から理想の子ども数を差し引いたところ、男女とも約50%が「変化なし」であった(図Ⅱ-33)。また、男女ともに、理想より「一人減」は約30%であるが、女性の方が5ポイント多く、女性の方が厳しい捉え方となっている。「二人以上減」は男女とも8%程度であった。現実数が理想数よりも「増加」となっている者の回答もあり、「子どもを理想数よりも多く持ってしまった」と考えていると推察される。



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

(出生率への影響)

理想の子ども数を実現されないことによる出生率への影響をみるため、現実を持てる子ども数だけに基づいて出生率を算出したところ、男女とも2.06となった(表Ⅱ-22)。

理想の子ども数を元にした出生率と比較すると、理想の子ども数を実現されないことにより、出生率が男性は0.23ポイント、女性は0.34ポイント低下すると算出される。また、理想数を実現されないことによる出生率の低下は、男性より女性の方が0.1ポイント以上大きい。

また、表Ⅱ-22では、理想数より現実数が多くなる回答を含むことに留意する必要がある。

表Ⅱ-22 現実を持てる子ども数に基づく予想出生率の算出(全回答者)

		(人、%)							
①	現実の子ども数	1	2	3	4	5	0	合計	
②	構成比	男性(1044)	15.2	44.3	26.7	4.1	1.2	8.4	100.0
		女性(1583)	14.2	47.4	25.1	3.7	1.3	8.3	100.0
③	①×②	男性	0.152	0.886	0.801	0.164	0.060	0	2.06
		女性	0.142	0.948	0.753	0.148	0.065	0	2.06
理想数を基に算出した出生率との差		男性	0.23						
		女性	0.34						

## (2) 現実に持てる子ども数に影響を及ぼす要因

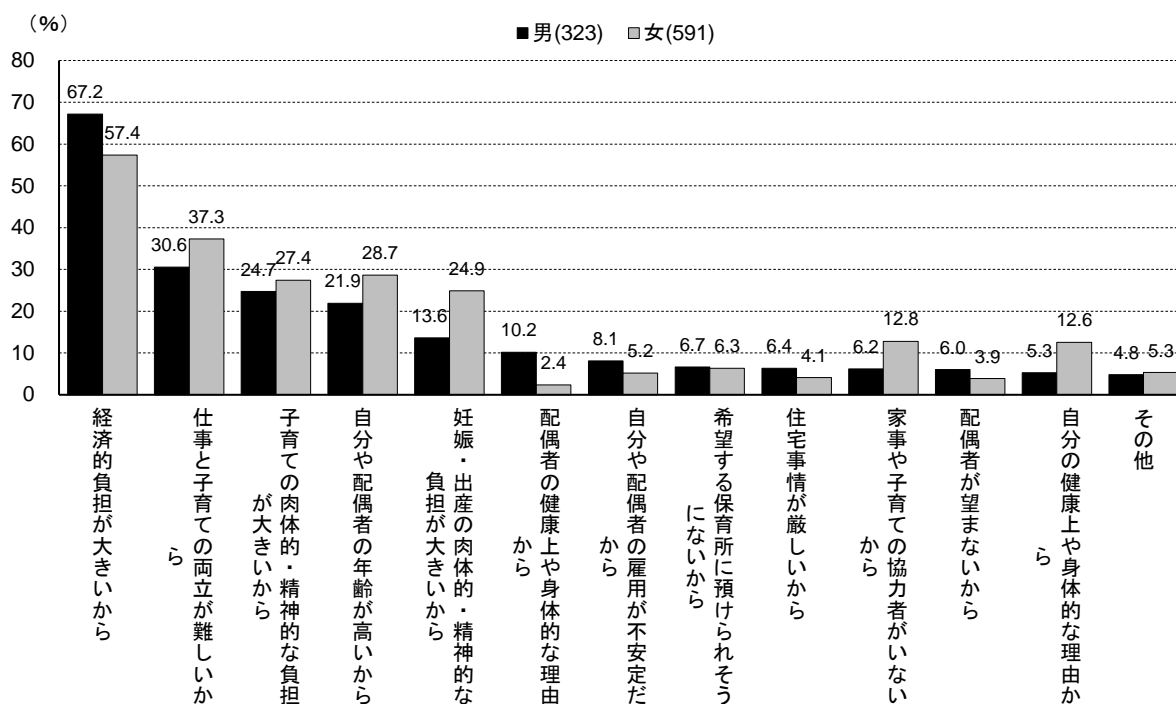
### ①現実に持てる子ども数が理想の子ども数より少ない理由

#### (経済的負担は現実に持てる子ども数を減少させる最も大きい理由)

現実に持てる子ども数が理想の子ども数よりも少ない者を対象に、その理由を把握すると、男性で「経済的負担が大きいから」が67%に達する(図Ⅱ-34)。女性でも57%に上り、「子どもはほしくない」、あるいは理想の子ども数が「一人」である理由(図Ⅱ-26)と同じ傾向がみられる。経済的負担は「理想の段階」と「理想と現実の差の段階」の二段階で、多くの者の子ども数に影響を及ぼしている。

回答が多様である女性に注目すると、「仕事と子育ての両立が難しいから」も37%と3分の1を超えている。この他では、「自分や配偶者の年齢が高いから」(29%)、「子育ての肉体的・精神的な負担が大きいから」(27%)、「妊娠・出産の肉体的・精神的な負担が大きいから」(25%)などが多くなっている。

図Ⅱ-34 現実に持てる子ども数が理想の子ども数より少ない理由(複数)



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウエイトバック集計である

②初婚年齢

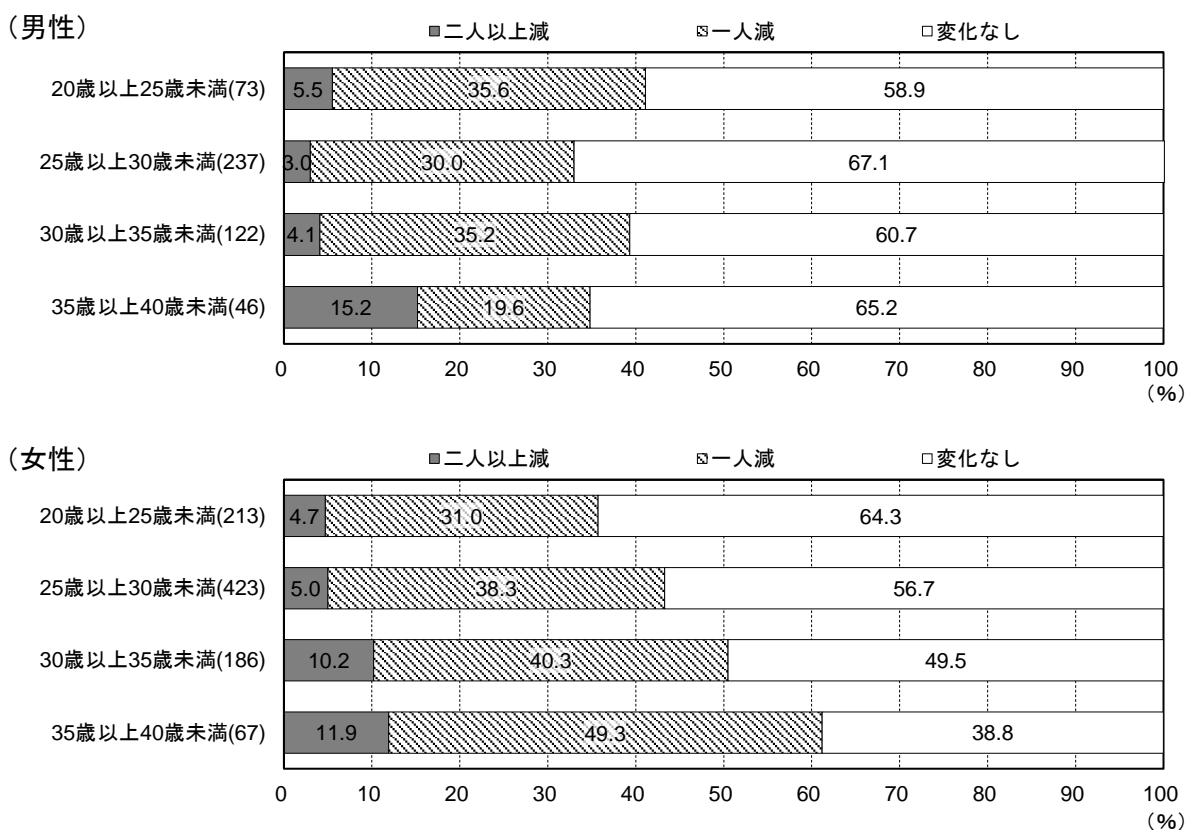
(初婚年齢は女性の現実に持てる子ども数を変化させる)

初婚年齢が、現実に持てる子ども数にどのような影響を及ぼしているか把握した。ただし、分析の対象は、現実に持てる子ども数ではなく、理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差である。また、現実に持てる子ども数が理想の子ども数と比べて「二人以上減少」「一人減少」「変化なし」の者であり、「増加」である者を含んでない(以下、同様)。

初婚年齢で分けて理想の子ども数と現実の差をみると、男性では「35歳以上40歳未満」で「二人以上減」が15%になるといった特徴がみられるものの、全体的な傾向はみられない(図Ⅱ-35)。

一方、女性では、結婚年齢が高くなるにつれ、「変化なし」が減少し、「一人減」と「二人以上減」の両方が増加していく。

図Ⅱ-35 初婚年齢別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同等か少ない既婚者)



### ③所得及び労働状態

#### i) 所得

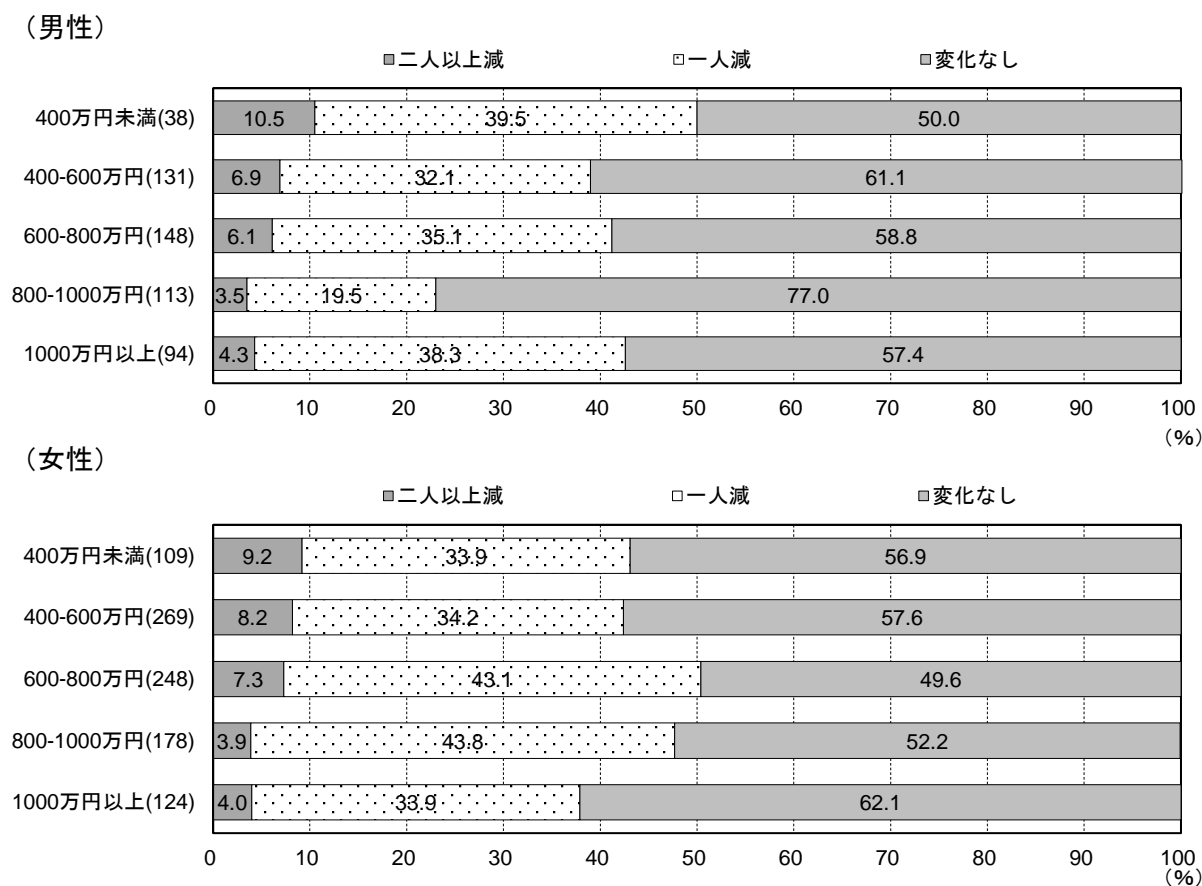
(男性では夫婦所得 1000 万円までは所得は現実に持てる子ども数にプラスの影響を与える)

有配偶者を対象にして夫婦の収入合計により理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差を比較すると、男性では、800-1000 万円までは、収入が増加すると「二人以上減」「一人減」が減少する傾向がみられる(図Ⅱ-36)。800-1000 万円では「変化なし」が77%になる。すなわち、夫婦の所得は1000万円までは、子ども数の理想と現実の乖離を小さくするように働いている。

ところが、1000万円以上になると「一人減」が800-1000万円に比べて大きく増加して、「変化なし」は57%に減少する。

女性でも、収入が増えるにつれて「二人以上減」が減少する傾向がみられる。ただし、男性のように1000万円以上で「一人減」が増加することはない。

図Ⅱ-36 夫婦の収入合計別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同数か少ない有配偶者)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1256	0.0861
P値	0.0354	0.0887



ii) 労働状態

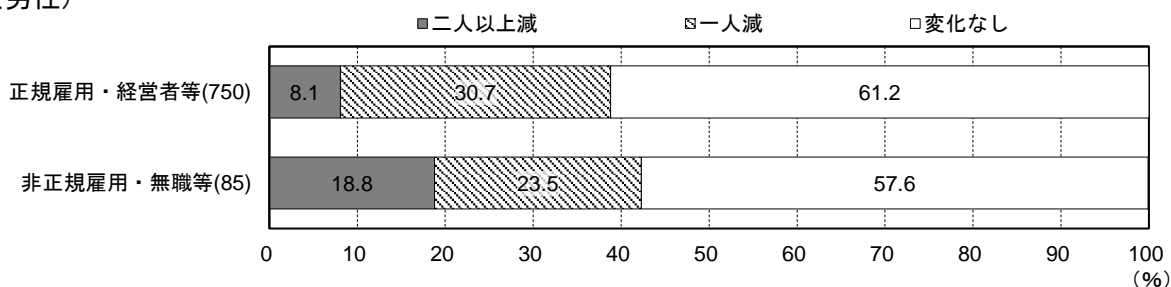
(正規・非正規の別は男性の現実に持てる子ども数を大きく変化させる)

男性では、「二人以上減」が「正規雇用・経営者等」が8%であるのに対して「非正規雇用・無職等」では19%に上る(図Ⅱ-37)。「二人以上減」であるので、理想の子ども数が「三人」の者が現実に持てる子ども数を「一人」とする回答が多くを占めると考えられる。

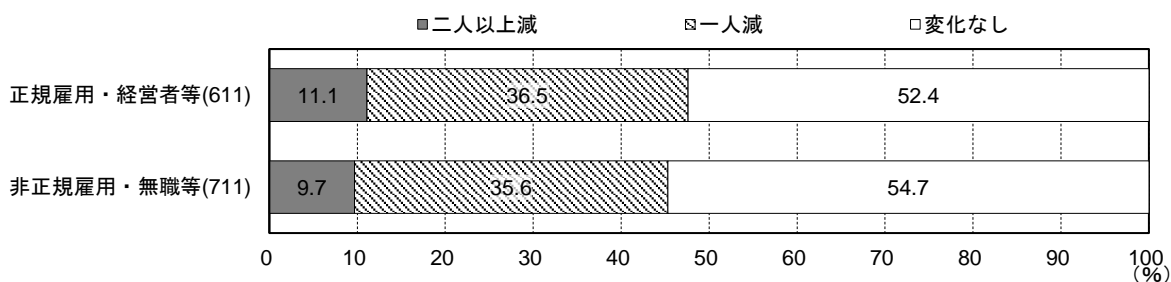
女性では、労働状態による違いはみられない。

図Ⅱ-37 労働状態別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同数か少ない学生を除く者)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0841	0.0429
P値	0.0158	0.2885

労働状態の現実に持てる子ども数への影響力を、理想数と現実数の差を「変化なし・一人減」と「二人以上減」の二区分にして算出すると、男性の「正規雇用・経営者等」では「非正規雇用・無職等」に対して「変化なし・一人減」の出現率が2.6倍になる(表Ⅱ-23)。男性では、正規・非正規の別が現実に持てる子ども数に対してかなり強く影響している。

表Ⅱ-23 労働状態の持てる子ども数への影響の強さ(学生を除く)

(件、%、倍)

性別	労働状態：正規雇用・経営者等			労働状態：非正規雇用・無職等			オッズ比
	N	変化なし 一人減少	二人以上 減少	N	変化なし 一人減少	二人以上 減少	
男	750	91.9	8.1	85	81.1	18.9	2.64
女	611	88.9	11.1	711	90.3	9.7	0.86

#### ④ 出産や子育てに対する職場の配慮

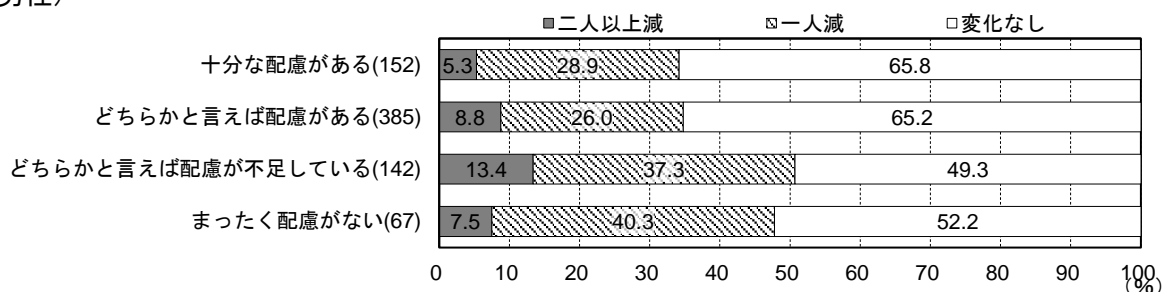
##### i) 出産への配慮

(職場の出産への配慮は男性の現実に持てる子ども数に強い影響力がある)

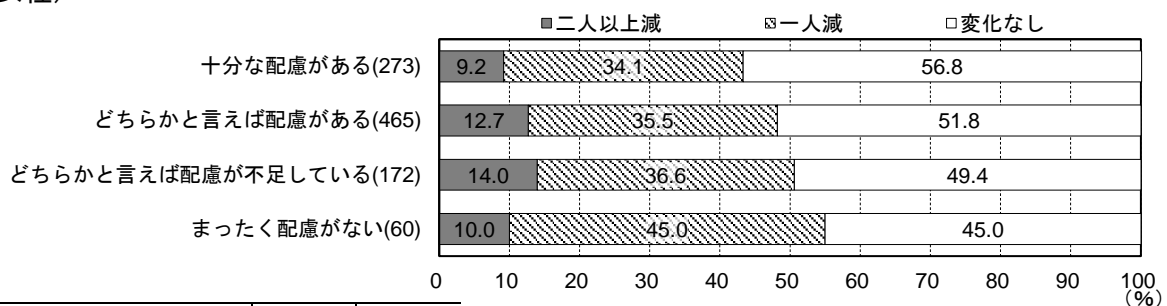
働いている人に対して、職場の出産に対する配慮を四段階で尋ねた。配慮の程度別に、理想の子ども数と現実に持てる子ども数の差をみると、男性で配慮なしと配慮ありの間に大きな差がみられる(図Ⅱ-38)。男性では「十分な配慮がある」「どちらかと言えば配慮がある」では「変化なし」が約65%であるのに対して「どちらかと言えば配慮は不足している」と「まったく配慮がない」では「変化なし」が50%程度に減少する。女性では特に変化は見られなかった。

図Ⅱ-38 職場の出産に対する配慮別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同数か少ない就業者)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1110	0.0575
P値	0.0053	0.3787

職場の出産に対する配慮の現実に持てる子ども数への影響力をみるため、職場の配慮を「配慮あり」と「配慮なし」に二区分すると、男性の「配慮あり」では「配慮なし」に対して「変化なし」の出現率が1.9倍となり、強い影響力がみられる(表Ⅱ-24)。女性では1.2倍であった。

表Ⅱ-24 職場の出産に対する配慮の持てる子ども数への影響の強さ(就業者)

(件、%、倍)

性別	職場の出産に対する配慮：あり				職場の出産に対する配慮：なし				オッズ比
	N	変化なし	減少	オッズ	N	減少	変化なし	オッズ	
男	537	65.4	34.6	1.89	209	50.2	49.8	1.01	1.88
女	738	53.7	46.3	1.16	232	48.3	51.7	0.93	1.24

ii) 子育てへの配慮

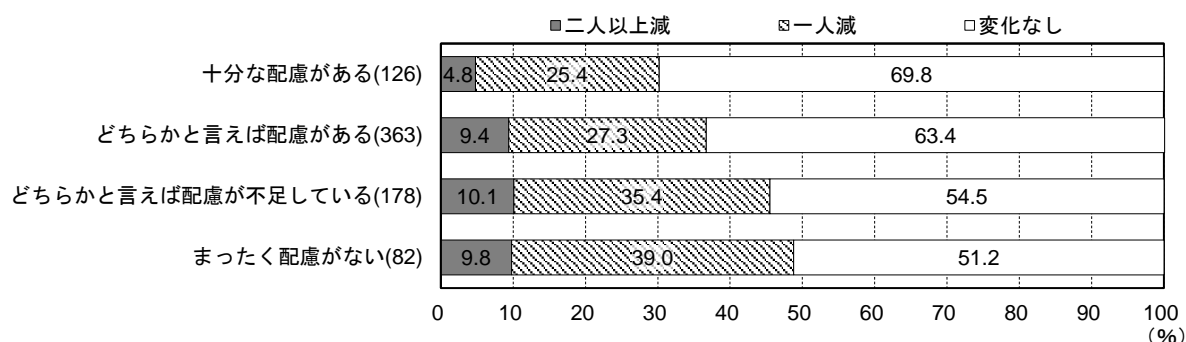
(子育てへの配慮も男性の現実に持てる子ども数に影響を及ぼす)

職場の子育てに対する配慮の影響も、出産への配慮と同様に男性で強く表れる(図Ⅱ-39)。

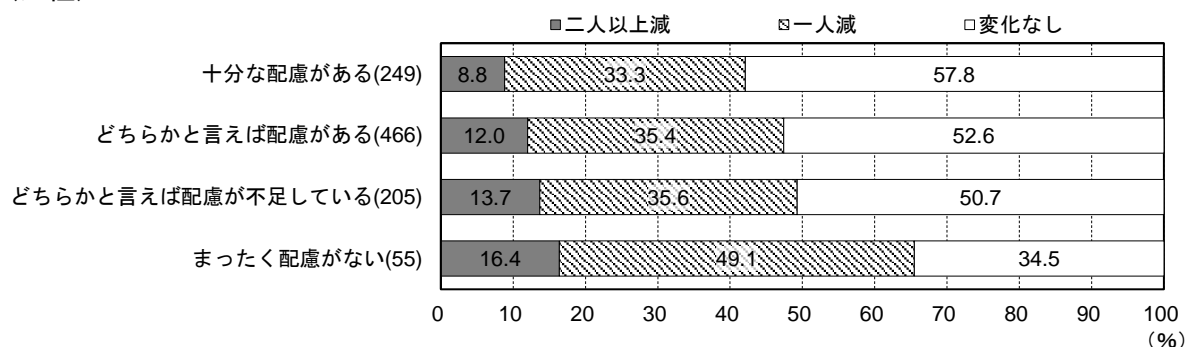
男性の「配慮あり」では「配慮なし」に対して「変化なし」の出現率が1.6倍となり、強い影響力がみられる(表Ⅱ-25)。女性では1.3倍であった。

図Ⅱ-39 職場の子育てに対する配慮別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同数か少ない就業者)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0934	0.0767
P値	0.0042	0.0752

表Ⅱ-25 職場の子育てに対する配慮の持てる子ども数への影響の強さ(就業者)

(件、%、倍)

性別	配慮あり				配慮なし				オッズ比
	N	変化なし	減少	オッズ	N	減少	変化なし	オッズ	
男	489	65.0	35.0	1.86	260	53.5	46.5	1.15	1.61
女	715	54.4	45.6	1.19	260	47.3	52.7	0.90	1.33

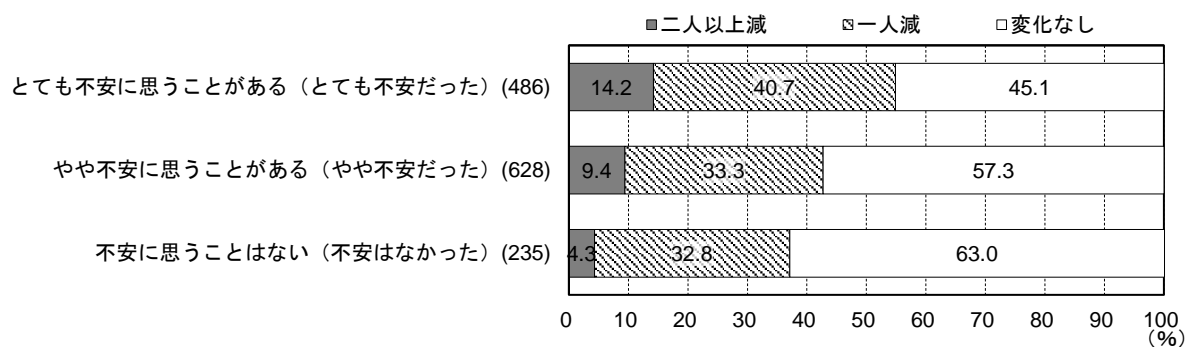
## ⑤妊娠・出産に関わる不安

(妊娠・出産に関わる不安は女性の現実に持てる子ども数を大きく減少させる)

女性の妊娠・出産に関わる不安の強さを3段階に分けて、理想の子ども数と現実に持てる子ども数の差をみると「とても不安」では「変化なし」は45%と少なく、「一人減」が41%、「二人以上減」が14%に達する(図Ⅱ-40)。

これに対して、「不安に思うことはない」では「一人減」は33%、「二人以上減」は4%にとどまり、不安感が少なくなるにつれて「変化なし」の割合が高くなっている。

図Ⅱ-40 妊娠・出産に関わる不安別にみた理想の子ども数と現実に持てる子ども数との差  
(現実に持てる子ども数が理想の子ども数と同数か少ない女性)



クラメールの連関係数	0.1108
P値	0.0000

「不安なし」と「不安あり」の二区分により「変化なし」の出現率をみると、「不安なし」では「不安あり」に対して「変化なし」の出現率が1.6倍になる。妊娠・出産に関する不安は、女性の現実に持てる子ども数に対して強い影響力を持つとみられる(表Ⅱ-26)。

表Ⅱ-26 妊娠・出産に関わる不安の持てる子ども数への影響の強さ (女性)

性別	妊娠・出産に関わる不安：なし			妊娠・出産に関わる不安：あり			オッズ比
	N	変化なし (%)	減少 (%)	N	変化なし (%)	減少 (%)	
女	1114	63.0	37.0	235	52.0	48.0	1.57